363.3-Y39ウ
1200500739564
3633
9

マルクス主義讀本

山内房吉著

始

363.3
Y39

マルクス主義讀本

山内房吉

1014
35

新版の序

思想・言論の自由が與へられた今日、青年は飢え渇いたもののように思想を要求してゐる。それは戰爭のために餘儀なくされてゐた思想的空白狀態から脱して、自己の據つて立つべき精神の據りどころを求めてゐるからであらう。ところが、この熱烈で眞劍な要求に答へるような書物は充分に供給されてゐない。これも戰爭の結果である種々な隘路のためではあらうが、遺憾至極と言はねばならぬ。この際、著述家、思想家など苟くも文化事業に携はるものは、何よりもかゝる要求に答へる義務があると思ふ。

本書はもともとマルクス主義の入門書として、今からおよそ十五年前に、嚴しい制約のもとで出版されたものである。從つて今日では著者として意に滿たないところが

尠くない。出來るなら、全體にわたつて補正または改訂の筆を加へたいのであるが、幸か不幸かこの書の紙型は戰災を免がれて書肆の手許に保存されてゐたので、資材難の折柄、なるべくこれを生かしたいとの書肆の希望を容れてこゝに出版することとなつたわけである。

しかし、この新版を出すに當つて、舊版では伏字になつてゐたところを全部うめたばかりでなく、出來得る限り字句の修正をも施した。その意味では面目を一新したと言へよう。

幸に、この書が眞理をもとめて社會科學の門に入らうとする青年諸君の渴望をみたす一助ともなればこの上もない喜びである。

一九四六年四月

山内房吉

はしがき

プロレタリアート解放への道を照明する唯一最高の理論たるマルクス主義の研究は、今や、吾々にとつて缺くべからざる生活的必要である。しかし、嚴格なる科學的勞作であるマルクス主義のオリヂナルは、初學者にとつては難解であることを免れぬ。そこで、これを出來るだけ平易に、しかも、マルクスの精神を歪曲することなく傳へやうといふのが、著者の意圖であり、本書の目的である。故に、本書は、マルクス主義概論又はマルクス主義入門とも稱すべきものである。

言ふまでもなく、マルクス主義の主要なる部分は經濟學において要約されてゐるが、それはまた、哲學、社會學、政治學等の領域を有してゐる。マルクス主義とは何ぞやといふ一般的課題に答へるためには、これらのすべてに亘つて概觀することが必要である。既にこれらの一つ一つについての優れた解說書は尠くない。けれどもその全般

に亙つたものは決して多くはないのである。で、私は不充分ながらそれを試みたつもりである。

私の淺學と、加ふるに檢閲制度に對する顧慮とは、殊に、政治學において國家の止揚に關する理論を充分に展開せしめなかつた。これは甚だ遺憾であるが止むを得ない。

本書全體の構成とマルクス學説の分類とは著者の創案に懸るものであつて、大方の批判と叱正とを乞ふものであるが、理論の解釋については努めて著者の僻見を避け、權威ある文献に從つた。しかもそれらの典據を明示することによつて、個々の學説についてより深い研究へ進まうとする讀者のための手引たらしめやうと考へたのである。そして私は本書の讀者がかく進まれんことを衷心から希望するものである。

一九三〇年四月二日

著者

マルクス主義讀本目次

第一章　序論……一
第二章　マルクス主義の哲學……九
一、哲學的唯物論……九
二、辨證法……一六
第三章　マルクス主義の社會學……二九
一、唯物史觀……二九
二、階級鬪爭説……四五
第四章　マルクス主義の經濟學……五四
一、マルクス經濟學の範圍と目的……五四
二、價値……五六

商品とは何か?——價値とは何か?——價値の創造者としての勞働——
貨幣の出現

三、剰餘價値……七三
二つの商品流通形態——貨幣の資本化——剰餘價値の源泉——勞働力の
價値——資本家的商品生産の勞働行程——價値增殖行程——不變資本と
可變資本——剰餘價値率と利潤率——必要勞働と剰餘勞働——相對的剰
餘價値と絶對的剰餘價値——生産力增大の歴史的段階——協業——分業
及びマニフアクチユア——機械及び大工業

四、勞　銀……一三七
勞働力の價値(または價格)の勞銀化——時間賃銀と請負賃銀——絶對的
賃銀と相對的賃銀

五、資本の蓄積行程……一五三
資本收入と資本蓄積——單純なる再生産——剰餘價値の資本化

六、恐慌と産業豫備軍……一六七
勞働者階級の增殖——恐慌

七、地代論……一七九
勞働地代——生産物地代——貨幣地代——資本制地代

八、資本主義最後の段階としての帝國主義……一八九
生産の集積と獨占——協定とコンツエルン——カルテルとシンヂケート
——集積過程の最高形態としてのトラスト——帝國主義の諸特徴

九、資本家的生産方法の終末……二〇〇

第五章　マルクス主義の政治學……二〇四

一、國家の本質……二〇四
二、國家の機能……二〇九
三、國家死滅說……二一三
四、國家死滅の經濟的基礎……二二七
社會主義社會——共産主義社會

目次終

マルクス主義讀本

山内房吉著

第一章　序論

マルクス主義とは何ぞや？　これを一言にして言へば、ドイツ人カール・マルクス及びフリードリヒ・エンゲルス(註)の見解と學說との體系である。それは、人類の最も進歩した三つの國家に屬する、十九世紀の主要なる思想的傾向を繼承し、完成したものである。卽ち、マルクス主義は、ドイツの古典哲學、イギリスの古典經濟學及びフランスの社會主義の天才的な統一であり、完成である。

(註)　Karl Marx (1818—1883)
Friedrich Engels (1820—1895)

今やマルクス主義は、すべての文明諸國において、ブルジョア的科學の敵となつてゐる。このことは、むしろ當然である。すべてのブルジョア的（御用學的、自由主義的）科學は、賃銀奴隷制を擁護するに反して、マルクス主義は、この奴隷制に對して、容赦なき闘爭を宣言したからである。階級闘爭の上に立つ現代の社會において、「公平なる」科學は存在しない。それを存在するが如くに期待することは、恰も資本の利潤を減少して、勞働者の賃銀を增大すべきではないかといふ問題において、「公平なる」工場主を期待すると同樣に、最も愚かな子供らしさにすぎない。

マルクス主義は、もちろん、「公平なる」學説ではない。それは近代ブロレタリアートの科學であり、その闘爭理論である。しかしながら、マルクス主義は世界文明の歴史の大道から離れて發生したものではない。反對に、人類の先進的諸思想が提起した諸問題に、明確なる科學的解答を與へた。この意味に於いて、マルクス主義は、先進の哲學、經濟學及び社會主義の最も偉大なる代表的學説の繼承者として現はれたのである。

こゝで、そのマルクス主義の「三つの源泉」(註)について簡單に考察しておくことが必要である。

1、**哲學**　マルクス主義の哲學は唯物論である。エンゲルスの著『ルードウイッヒ・フォイエルバッハ』及び『反デューリング論』の中に、最も明瞭且つ詳細に現はれてゐるやうに、マルクスとエンゲルスとは、最も決定的に哲學的唯物論を固守し、この基礎から、あらゆる唯心論的誤謬を駁擊した。かれらは十八世紀の機械的唯物論を前進させ、殊にヘーゲルの體系を把握することによつて、これを豐富にした。

マルクスは、哲學的唯物論を深化し、發展せしめつゝ、これを人間社會の認識にまでおしひろめた。このマルクスの哲學は、完成された哲學的唯物論

（註）レーニン著「マルクス、エンゲルス、マルクス主義」參照

であつて、人類殊に勞働階級に大なる認識の武器を與へたのである。

2、經濟學　マルクス以前の經濟學は、資本主義の最も發達したイギリスにおいて完成された。アダム・スミス及びダヴイッド・リカルドは、經濟的組織を研究して、勞働價値論の端緒を開いた。マルクスは、かれらの事業を繼承したのである。そして、彼はこの理論を嚴格に基礎づけ、徹底的に發展せしめた。かくて彼は、すべての商品の價値は、それの生産に費やされた、社會的に必要な勞働時間の量によつて決定されることを發見したのである。卽ち、ブルジョア學者が、物の關係を見たところに、マルクスは人間の關係を見た。資本は、この關係の最も發展した形態を示し、人間の勞働力が商品となつたことを意味してゐる。賃銀勞働者はその勞働力を、土地、工場、その他勞働手段の所有者に賣り、自己及びその家族の生活費(勞賃)を回收するために必要な勞働時間以上に、無償で働くことによつて資本家階級の富の源泉であり、利潤の源泉である剩餘價値を、資本家のために作り出すといふことを發見した。これがいはゆる剩餘價値說であつて、マルクスの經濟理論の基礎である。

3、社會主義　封建主義、農奴制度の崩壞を伴つたところのフランスの革命は、諸階級の鬪爭が、あらゆる發展の基礎であり、原動力であることを、明かに表示した。マルクスは、かかる歷史の敎ふる結論を、こゝから導き出し、これを徹底せしめた。その結論とは、階級鬪爭の學說である。

マルクス主義の主要なる學說は、かくの如く、以上の三つの源泉から導きだされたものである。だが、プレハーノフによれば、マルクス主義は一つの全世界觀である。それは、古ギリシヤにおいて、デモクリトスにより、また部分的には、その先驅者たるイオニアの思想家たちによつて、根底を置かれた世界觀が、現に到達せる最高の發達段階を示すところの近代的唯物論であ

る。いはゆる史的唯物論及びそれと密接の關係ある經濟學の任務、方法、範疇及び社會、殊に資本主義的社會の經濟的發達に關する思想の一團は、殆どみなマルクス及びエンゲルスに負ふものである。これらの領域において、先驅に立つた人々が來し遂げたところは準備作業にすぎず、材料の蒐集たるに過ぎなかつた、といつても敢て過言ではないであらう。その材料は豐富であり、價値に富んでゐたとはいへ未だ組織だてられておらず、統一的思想によつて照明されることもなく、從つて充分にその意義を發揮するやうに利用されたこともなかつたのである。(註)それがマルクスによつて始めて統一され、組織だてられ、かくて社會主義は一箇の科學となつたのである。

あらゆる社會思想は、無產階級解放の原理として提出された。しかも、それらは科學にまで完成されなかつたが故に、問題を解決する力を缺いてゐた。マルクス主義は、一箇の科學であり、隨つて最も達觀的なプロレタリアート

(註) プレハーノフ「マルクス主義の根本問題」參照

の社會認識である。それは資本主義社會の必然的沒落と、社會主義社會の必然的到來とを科學的に說明する唯一の學說である。それ故にマルクス主義は、科學的社會主義、または科學的共產主義といはれる。

しからば、マルクス主義は、社會主義の歷史において如何なる位置を占めるものであるか。エンゲルスによれば、マルクス主義以前の社會主義は、すべて空想的社會主義であつた。科學的社會主義として出現したマルクス主義は、それ以前の社會主義にとつて代り、十九世紀後半以後、全世界に跨る一大勢力となつたのである。かくして、カール・マルクスの名は社會主義史上、最も偉大なる、最も影響力をもつものとなつた。革命の理論たるマルクス主義は、社會主義史上においても亦革命的な役割を演じたのだ。今日、世界の文明國において、彼の名と彼の學說とが普及してゐない國はない。それほど世界の發展の客觀的事實は、マルクス主義の眞理性を立證しつゝ發展してゐ

るのである。

マルクス主義の全理論は、一箇の統一された世界觀によつて貫かれてゐるとはいへ、それは哲學、社會學、經濟學、政治學等の諸方面に亘つてゐる。哲學としては辨證法的唯物論を、社會學としては唯物史觀を、經濟學としては剩餘價値說を、政治學としては國家の發生、發展及び死滅の學說を、その主要內容としてゐる。これらを要約して、マルクス主義とは何ぞやといふ問に答へるためには、生產機關の集中的共有、階級の廢絕、國家の死滅、卽ち共產主義社會の必然的到來を說明するところの學說であり、それを希求するところの一つの主張であるといふことができるであらう。しかし、マルクス主義を全體的に理解するためには、以上の分類に從つて、系統的に研究する必要がある。私は、順を逐ふてこれが解說を試みるであらう。

第二章　マルクス主義の哲學

一、哲學的唯物論

マルクス主義の哲學は、唯物論と辨證法との結合統一である。マルクスは、かれの見解がやうやく固まつた一八四四—四五年頃から、唯物論者であり、特にフォイエルバッハの學徒であつた。しかも、元來ヘーゲル學派であつたマルクスは、進化についての最も全面的な、しかも最も內容の豐富な學說を、ヘーゲルの辨證法の中に認めた。そして、これをドイツ古典哲學の最大の收獲とし、これ以外のあらゆる他の進化の原理、または發達の原理に關する學說は一面的な、內容の貧弱な、不具的なものであつて、自然及び社會における進化の眞實の過程を不具ならしめるものであると考へた。かくして、マルクスはフォイエルバッハの唯物論とヘーゲルの辨證法とを結びつけるこ

とによつて、獨自の哲學、辨證法的唯物論を創說したのである。

唯物論者としてのマルクスは、フオイエルバツハの學徒であつたが、後に至つて彼の唯物論が徹底さと全面性とを缺いてゐる點に、その弱點を見出した。フオイエルバツハの唯物論の劃時代的意義は、ヘーゲルの觀念論からの決然たる分離と、すでに十八世紀において、一切の形而上學に對する鬪爭であつたところの唯物論を宣言した點にあつた。マルクスは書いてゐる。『ヘーゲルにとつては、かれが觀念(イデー)の名のもとに、一つの獨立せる主體にまで轉化したところの、かの思惟過程は、現實的なるものの創造者である……。私にあつては、これに反して、觀念的なるものは、人間の頭腦に移植された物質的なものに外ならぬ』(註)と。エンゲルスもまた、マルクスのこの唯物論と照應して書いてゐる。『世界の統一性は、その實在にあるのではない。それは哲學と自然科學の、長く且つ困難な發達によつて實證されたところの物質性にあるのである。……運動は物質の存在形態である。何時、いかなる所にも運動なき物質、物質なき運動はなかつたし、またあり得ない。……もし、思惟とは何ぞや、認識とは何ぞや、それらはどこから來るかと問題を提起するならば、われわれは、それは人間の頭腦の產物であり、人間自身は——自然の或る環境において、且つそれと共に發達し來たる自然の產物であることを知るであらう。されば、結局のところ、やはり自然の產物であるところの人間の頭腦の產物は、自然の自餘の關係と對立するものでなく、これに適應することは自明の理である。』(註)

元來、哲學上の根本問題の一つとして、物質を以て世界の本體となすか、それとも精神をもつて世界の本體となすかの問題がある。そして物質を以て本體、卽ち本原的實在となし、精神は、それから派生せる存在であるとなすところのものを唯物論と稱し、これに反して、精神を以て本體、卽ち本原的

(註)「資本論」第一卷第二版跋文

(註) エンゲルス著「反デューリング論」

實在となし、物質はそれから派生する存在であると見做すところのものを唯心論といふのである。フオイエルバッハの唯物論も、結局において、その唯物論に外ならない。彼によれば、人間と自然との外には何物もない。人間よりも自然よりも、より高級な實在なるものは、實は人間の宗教的想像が生んだものであつて、畢竟、われ〳〵の個性的想像にすぎない。また、思惟と實在との眞正の關係はたゞ次の如くである。――實在（ザイン）は主體であり、思惟（デンケン）は客體である。實在は自己より出でゝ自己に存するのである。

マルクスとエンゲルスとが、かゝる哲學上の唯物論を繼承してゐることは、すでに述べた。だが、彼らとフオイエルバッハとの相違は、前述の唯物論にヘーゲルの辨證法を結びつけて、いはゆる辨證法的唯物論にまで發展せしめたことである。卽ち、彼らはヘーゲルとフオイエルバッハとを繼承したのであるが、同時に、かれらを批判的に攝取したといふことを忘れてはならない。

彼ら自身の說明を聞かう。

『ヘーゲルは觀念論者であつた。卽ち、かれにとつては、われ〳〵の頭腦の思想は、實在的なる物と過程との、多かれ少なかれ、抽象的な反映ではなく、否、却つてヘーゲルにあつては、事物とその發展とは、世界發生前から、どこかに存在してゐた何らかの觀念の反映であつた。』

『すべての哲學、殊に近代の哲學の大なる根本問題は、思惟と實在、精神と自然との關係の問題である。何が何に先行するか、精神が自然にか、或ひは、自然が精神にか？　……哲學はこの問題に、如何に答ふるかによつて二大陣營に分裂した。精神が自然に先だつて存在することを主張し、從つて何らかの種類の宇宙創造を認容した人々は、觀念論の陣營を形成した。そして自然を本原的に見た人々は、唯物論の種々の流派に屬した。』（註）

觀念論と唯物論に對する、これほど明確な說明は外にない。レーニンは、

（註）エンゲルス「フオイエルバッハ論」

このエンゲルスの見解を評して、唯物論と觀念論とに對するこれ以外の觀念は、單に混亂を招くにすぎないと言つてゐる。マルクスは、常に何らかの種類の宗教と結びついた觀念論を排撃したばかりでなく、當時普及してゐたヒューム及びカントの見地や價値論や批判主義や、種々の形をとつた實證主義をば、決定的に排撃した。かれは、これらの哲學を觀念論に對する反動的譲歩、または、せい〳〵「公衆の面前から放逐されたものを唯物論の裏門からこつそり引き入れるに等しい」ものと見做してゐた。この問題については、前掲の諸著の外、マルクスがエンゲルスに宛てた手紙(註)において、論究されてゐる。こゝで、自由と必然との關係に對するマルクスの見解を明かにして置く必要がある。これに就いてエンゲルスは、『反デューリング論』の中で言つてゐる。『それが認識されざる限り、必然は盲目的である。自由とは必然の認識である』と。このことは、必然の、自由への辯證法的轉化、卽ち自然の客

(註)　一八六六年一二月一二日附のもの

觀的合法則性、事物の本質の現象への轉化等を意味してゐる。かくてマルクスとエンゲルスとは、フォイエルバッハをも含むところの古い唯物論の根本的缺陷を、次の如く指摘したのである。

(一)　古い唯物論は、餘りに機械的であつて、化學及び生物學の最近の發展を考慮に入れてゐない。

(二)　古い唯物論は、非歴史的であり、非辯證法的であつて、發展の見地を徹底的且つ全面的に展開しなかつた。

(三)　それは人間の本質を抽象的に理解し、總體として、全社會的關係として理解せず、從つて、世界の變化が問題になつた時にのみ、世界を説明するに止まつた。卽ち、革命的、實踐的行動の意義を理解しなかつた。

これらの指摘の中に、マルクス及びエンゲルスの哲學的見解が最も明確に語られてゐる。レーニンは、(一)に附加して、『われわれの時代においては、

更にこの上に、物質に關する電氣學說を加へねばならない』と言つてゐる。(註)古い唯物論は、反辨證法的であつた限りにおいて、形而上學的であつた。マルクス、エンゲルスの哲學的功績は、かゝる古い唯物論を辨證法的唯物論にまで發展せしめた點にある。このことは彼らの辨證法を說明することによつて、一層明らかとなるであらう。

二、辨　證　法

唯物論者としてのフォイエルバッハは、マルクスとエンゲルスとに深い影響を與へたが、しかし、彼はヘーゲル哲學の革命的方面たる辨證法を、無用のものとして、簡單に排棄した。しかるにマルクスとエンゲルスとは、辨證法にこそ進化についての最も全面的な、最も內容の深刻、豐富なる學說を認めて、これを再び採りあげたのである。彼等は、これをもつてドイツ古典哲

(註)　前揭書

學の最大の收獲とし、この辨證法以外のあらゆる他の進化の原理、または發達の原理を、一面的な、內容貧弱な、不具的なものであつて、自然及び社會における進化の眞實の過程を不具ならしめるものと考へたのである。これについて、エンゲルスは言つてゐる。『余とマルクスとは、意識的辨證法を、ヘーゲル哲學をも含めた觀念論の混亂から救ひ出し、それを自然の唯物論的理解に移すことを任務とした、殆ど唯一のものであると言ひ得る。……自然は辨證法の正しいことを確證する。そして最近の自然科學が示すが如く、この確證は極めて豐富であつて、毎日その材料を山の如く提供し、自然における一切のことが辨證法的であつて、形而上學的でないことを示してゐる。』

『世界はすでに完成されたものでなくして、過程の複合體として自らを現はす。そして、この過程において、外見上不變の、諸々の事物と、われわれの頭腦における、その思想的映像たる諸々の概念とが、或ひは現はれ、或ひ

は消ゆる不斷の變化の中に見出されるのである。――この偉大なる根本的思想は、ヘーゲルの時代以來、普通一般の意識の中に入つてゐるものであつて、その一般的な點においては、少しも異論なきまでに至つてゐる。だが、これを言葉の上で認めることゝ、それをあらゆる個々の場合に、また、あらゆる研究の領域において摘用することゝは、自ら別である。』(註)

マルクスとエンゲルスとは、この辨證法を、あらゆる個々の場合及びあらゆる研究の領域において摘用した。だが、辨證法とは一體何であるか。辨證法的哲學にとつては、永久に固定したもの、絶對的なるもの、神聖なるものは決してあり得ない。それは、あらゆるものの上に、そしてあらゆるものの中に、避くべからざる沒落の烙印を見る。そして、發生と消滅との不斷の過程と、低きより高きに向ふ無限の向上以外には、何ものも、その前に立つことを得ない。辨證法自身が、思惟する頭腦における、この過程の單なる反映に過ぎ

(註)　前掲書

ないのである。かくてマルクスにおいては、辨證法とは、外界の世界におけると等しく、『人間思惟における運動の、一般的法則に關する學』である。

マルクスは、かゝる辨證法を、ヘーゲルのそれから學んだのであるが、その取扱ひ方において、ヘーゲルとは根本的に相違してゐる。哲學上の世界觀において唯心論の立場をとつたヘーゲルにとつては、辨證法は、理念(イデー)もしくはロゴスの發展法則に外ならない。彼によれば、世界は自然及び人間を通じての、絶對者たるイデー若しくはロゴスの發展の現はれなのであるが、この發展は次の如き段階をとるものである。第一は、それ自身の狀態にある段階であつて、その中に發展の要素、即ち矛盾の要素を含んではゐるが、しかし、それがまだ發展するに至らず、なほ自個同一を保てる狀態である。次に、その發展の要素たる矛盾が發展して、第一に對する對立物にまで轉化する。そして、この對立が發展すると第三のものに飛躍綜合せられて、第一でも、第二でもな

いところの、しかし第一のものも第二のものも、その中に保存せらるゝところの、より高き新たなるものとなる。この最後の過程を、ヘーゲルは止揚（アウフヘーベン）と名づけ、この發展の法則における三つの段階を、正（These）反（Anti-these）合（Syn-these）なる言葉をもつて言ひ現はした。そして、この發展の法則を稱して辨證法といふのである。ヘーゲルによれば、萬物はこの法則に從つて發展するものであつて、哲學の任務は、人間の思惟の辨證法をもつて、萬物の辨證法的發展を思惟（ナハデンケン）するにあるといふのである。しかるにヘーゲルによれば、世界は自然及び人間を通じての、絶對者たる理念及びロゴスの發展の現はれなのであるから、かれの辨證法もまた、理念もしくはロゴス、即ち結局において、精神の發展法則に外ならない。彼によれば、かかる精神（ガイスト）は、辨證法によつて自然に發展し、次に現實の精神に發展する。即ち、精神（正）――自然（反）――現實の精神（合）となる。ヘーゲルにあつては、自然は精神の發

（註）アウフヘーベン（aufheben）は又「揚棄」とも譯される。

展の一段階であり、現實の精神ならんがために外化する精神に外ならない。かくて、ヘーゲルの辨證法は唯心論の上に「逆立」してゐるのである。マルクス、エンゲルスは、辨證法そのものを採用したにも拘らず、この點においてヘーゲルと全く異るのである。これについて、マルクスは言つてゐる。『私の辨證法的方法は、根本においてヘーゲル流のそれと異るのみでなく、また正反對のものである。ヘーゲルにとつては、思惟行程――かれは更にこの行程を理念とよんで獨立の主體たらしめてゐるが――は、現實世界の創造主であつて、現實はたゞ、思惟行程の外部現象たるにすぎない。これに反して、私の立場から見れば、觀念世界なるものは、畢竟するところ、人類の頭腦の中に移植され、飜譯された物質世界に外ならないのである。』『辨證法は、ヘーゲルの手で神秘化されたとはいへ、この事實は決してヘーゲルが始めて辨證法の一般的運動形態を包括的に、且つ意識的に說明したものであることを

妨げるものではない。ヘーゲルにおいては、辨證法は逆立してゐる。われわれは、神秘の外被の中に合理的の核心を見出すために、この逆立した辨證法を、更に顚倒せしめなければならない。』(註)

この唯物論的辨證法は、マルクスのすべての研究乃至觀察の基礎となつてゐる。故に、マルクスの思想を完全に理解するためにも、この辨證法の把握は絶對に必要である。次に、やゝ詳細にこれを説明するであらう。

ヘーゲルにあつては、永久に不可知なる絶對的觀念が存在して、すべての現實的社會の根本精神をなす。從つて、その精神の發展を説明するために用ひられた辨證的方法は、たゞ抽象的な役目をつとめるにすぎなかつた。しかるに、マルクスは、この頭の上に逆立してゐる辨證法を再び足の上に立ち返らしめ、革命的なる唯物論的辨證法を作りあげたのであるが、これが確固、不動のものとして確立されるためには、科學の進歩が必要であつた。第一に、

(註)　マルクス「資本論」第一卷第二版序文

細胞と固體の發見、第二に、熱、光、電氣、磁氣、化學的エネルギー等の種種のエネルギーが、不斷の變化の過程にあること、第三に、ダーウインの進化論によつて一切の自然物(人類をも含む)が元來、個々の胚種から長い進化の過程を經て發達したものであり、この胚種もまた化學的に發展する原形質及び蛋白質から發生するものであること等が科學の進歩の結果として明かとなつたことなどが、それである。これらの事實によつて、すべての物質の間に矛盾が存在し、それが正、反、合の過程を經て變化するものであることが證明せられたのである。物質の運動の高等なる形式であるところの有機的生命の進化についても、同樣のことが言はれ得る。生命もまた、絶えず發生し、消滅するところの矛盾に外ならないものであつて、矛盾が存在する限り運動が繼續し、矛盾が消失すれば生命も止り、死が來るのである。マルクスとエンゲルスとによつて發見された、この唯物論的辨證法の法則は、かくて自然

に關しても人類社會に關しても、完全に當てはまるものである。そして一つの命題が、これを否定する反命題と對立し、さらに否定の否定たる綜合命題に統一される止揚の過程は、飛躍的である。卽ち、量の變化が一定の段階に達すると、突然質的變化を生ずる。その實例を擧げてみよう。

炭素化合物の中の蟻酸（CH_2O_2）といふ一定の質を有するものをとつて、その各分子を二倍しても量の變化があるだけで、質的變化は起らないが、もし、酸素のみをそのまゝにして置いて他の分子を二倍すれば、新たに醋酸（$C_2H_4O_2$）といふ新質に突然變化するのである。また、冷水に一定量の溫度を加へて溫湯とする間に、攝氏一〇〇度まで熱が增加すれば、突然質的變化を生じて蒸氣となる。人間が母胎に宿つて漸次進化的に發達して行つて、一定の時期に達すると出產といふ一大飛躍を遂げて、一人の人間となる。さらにその人間の成年期、老年期に現はれる肉體的及び精神的の變化から、固體の滅亡としての死の到來についても同樣のことがいへる。病人について言へば、病氣の峠までは病勢が漸進的に進んで行つて、最高頂に達すると、突然變化を生じて、死（固體の滅亡）を招くか、或ひは恢復期に入つて次第に下り坂となる。經濟史について見れば、農業勞働者の奴隸制度が、生產と通商との發達によつて、次第に支へきれなくなると、地主は漸進的手段を講じて、一定の地域內で農奴に移住の自由を許すとか、强制勞働を制限して、地代または金錢貢納を認めるとかして行く中に、農奴制度そのものの廢止に必要な一切の條件が成熟する。そして一定の段階に達すると、多かれ少かれ暴力を伴つて、突然的變革を遂げ、自由な勞働による個人本位の生產が行はれるにいたる。

否定の否定といふことについても、われ〳〵は多くの例證を擧げることができる。例へば、一粒の穀物が地に落ちて、適當の溫度と濕度とにあへば、變化を生じて發芽する。この時、その種子の存在は否定せられるが、さらに

成長して、その種子に幾倍する穀物を生ずるやうになると、その植物の莖は枯れ、根は朽ちる。卽ち否定の否定によつて數等の進展を見るのである。さらに、動物について見よう。蝶を觀察すると、卵の否定によつて生じた幼虫が、成熟して種の結合を行ふと、雄虫は直ちに死し、雌虫は多くの卵を生んで生を否定する。數學についても同樣のことが言へる。或る數を否定してマイナスを附し、さらにこれを自乘すれば、マイナスを否定してプラスの二乘となる。同樣にして、原始時代の土地共有制が私有制によつて否定せられ、さらに、より高い社會段階に達すれば高度の共產主義に入るが如き、また舊式の固定的な機械的唯物論が、唯心論によつて否定せられ、さらに、それが近世の自然科學の發達によつて、さらに否定せられて、近代的唯物論を生じた如き、自然、人間社會及び思惟の辨證法的發展に關する例證は、枚擧に遑がないのである。マルクスは、『資本論』において、この原理を鮮かに適用し

てゐる。――勞働者が、生產手段を私有することを基礎として成立した小規模生產が、いはゆる資本の集積によつて、生產品が直接生產者に歸屬する制度、卽ち、自己の勞働によつて作りだした私有財產を保持するといふ制度が否定せられ、生產者、消費者の直接の必要を離れた生產を勞働者に强制するところの、資本家的生產方法及び所有方法が、生產力發展の必然の結果として否定せらるゝに至るといふが如きである。かやうに、唯物論的辨證法はブルジョアジーとプロレタリアートとの對立してゐる現代の社會にも適用される。といふよりも、これこそがプロレタリア運動に革命的理論を與へるものである。ブルジョアジー獨裁の社會に內在する矛盾の發展によつて、ブルジョアジーを否定するプロレタリアートが擡頭し、初めの中は力の平均を保つにすぎないが、漸次その勢力を增大して行き、一定の段階に達すると、革命といふ飛躍的變革が行はれて、プロレタリヤ獨裁の社會が持ち來され、さら

に、階級制度の撤廢が實現される。この過程は、唯物的辯證法そのものであり、それによつてのみ說明され得るのである。

辨證法は、しば〳〵進化論と混同される。事實、前者は後者の一種であるが、しかし、一切の變化は徐々にのみ行はれるものであつて、自然も歷史も飛躍を知らないといふ原理の上に立つところの粗雜な進化論とは、根本的に異なるものである。ヘーゲルは、すでに、かゝる發展の觀念が確固たるものでないことを證明した。彼によれば、意識は、發生または消滅を理解すべき場合に、漸次の生起または消失として表象することによつて、それを理解し得たと考へる。しかるに、一般に實在の變化は、單に或る量から他の量への推移を意味するものではない。量的なるものから質的なるものへの轉化、またはその逆を意味するものであつて、つまり、漸次的なものの中斷であり、前行の實在とは質的に異るところの化成である。しかして發展經過の漸次性が中斷される時には、常に飛躍が存在するのである。この飛躍が自然においても、歷史においても、如何にしば〳〵生ずるものであるかといふことを、ヘーゲルは例證を示して論じてゐる。卽ち、發生の漸次性については、發生するものは、すでに感覺的にまたは一般に現實的に存在してゐるが、たゞその微少性のために、未だ知覺し難いといふ表象が、根柢に存在してゐる。同樣に、消滅の漸次性については、無またはその代りに現はれて來るものが、やはり存在してゐて、たゞ、未だ認知され難いといふ表象が根柢に存してゐる。かくして發生及び消滅は、一般に止揚されるのである。變化の漸次性によつて、發生及び消滅を理解せんとするのは、愚かな循還論法である。けだし、この場合には、すでに發生者または消滅者が豫想されてゐるからである。

發展の過程における飛躍の必然性についてのヘーゲルの辯證法的見解は、

マルクス及びエンゲルスの採用したところであつた。すでに述べた如く、エンゲルスは、『反デューリング論』の中で、これを唯物論的基礎の上に立て、しかも近代科學の中に、その例證を求めた。かくしてかれはエネルギーの一形式から他の形式への推移は、飛躍なしには不可能であることを證明したのである。そして一般に辨證法的思惟の法則は、實在の辨證法的屬性によつて確證される。こゝでもまた、實在が思惟を制約するのである。

或る種の批評家は、辨證法は、一方において論理學と抵觸し、他方において唯物論と抵觸するといふ。例へば、ベルンスタインは、マルクス及びエンゲルスに誤謬のあることを指摘して、その原因を辨證法の有害なる影響によるものとした。形式論理學は、『然り、然り及び否、否』の法式を保持するに反して、辨證法は、この法式をば『然り、否、及び否、然り』なる法式に變化せしめる。そしてこの法式は、思惟の根本原理に抵觸するといふのである。

それは何故か？

思惟の根本原理は、一、自同性の原則、二、矛盾の原則、三、不容間位の原則の三つである。

自同性の原則とは、AはAなり、またはA＝Aといふにある。

矛盾の原則とは、Aは非Aにあらず、即ち第一の原則の消極的方式を提示するものにすぎない。

不容間位の原則によれば、相反せる排他的なる二箇の意見は、同時に二つながら僞りたることを得ない。何となれば、Aが、あるひはBであり、あるひは非Bであるといふ命題の中の一方が眞理である場合には、他方は必然に僞りでなければならぬ。この場合には、第三の命題は存在しないし、また明かに存在し得ないのである。

ユーバーウエッヒは、矛盾の原則と不容間位の原則とを合一して『相反的

『選言體の原則』即ち、特定の客詞が特定の主詞に歸屬するや否やの問題は、それが充分に規定せられ、且つ常に同一意味に解せられる限りは、然りと答へられるか、または否と答へられるかでなければならぬ、と論じた。

辨證法論者といへども、これに對して反對するものではない。だが、この原則が妥當なる場合には、『然り、否、否　然り』なる法式は、全然、維持しがたいものとなるであらうか。若し然りとすれば、何故にヘラクリトスやヘーゲルや、マルクスの如き深刻なる思想家が、右の法式をもつて、『然り、然り、否、否』の法式よりも、より完全なるものと考へ得たであらうか。

辨證法に對する、かゝる非難は、一見反駁しがたいもののやうに見える。けれども、われわれは、この斷定を下す前に、この問題そのものを、他の方面から考察する必要がある。

物質の運動は、一切の自然現象の根柢を構成する。ところで、運動とは

そも〳〵何であるか。それは外見上、矛盾である。何となれば、運動する物體は、特定の瞬間において、どこに存在するのであるか？　形式論理學の法式によつては、到底これに正しい解答を與へることはできない。運動する物體は、同一の瞬間において、ある場所にあり、同時にその場所にない。それは『然り、否、否、然り』の法式によつてのみ理解される。即ち、それは辨證法的にのみ思惟し得るのである。

プレハノフは、社會學における辨證法の重要性を知るには、ユートピアから科學への、社會主義の發達を想ひ起せば充分であると言つてゐる。(註)ユートピスト達は、人間の本性といふ抽象的立場から出發して、「然り、然り、否、否」の法式によつて社會現象を判斷した。彼らの見解によれば、例へば、所有權は人間の本性に合するか、でなければ、それに反するのである。その際、人間の本性なるものは、不變的なものとして思惟されたために、かれらは多

(註)　プレハノフ著「マルクス主義の根本問題」

數の可能的社會組織の中で、人間の本性に最もよく合するものがなければならぬと考へた。かくてかれらは、その最良の――卽ち、人間の本性に最も適合する秩序を求めることに努力した。そしてユートピスト達は、各自かゝる秩序を見出し得たと盲信したのである。これに反して、辨證法的方法を用ゐたマルクスは、空想的社會主義のかゝる非科學的思惟方法に致命的打擊を與へ、社會主義を科學の域にまで高めた。彼は、社會秩序の基礎を人間の本性などに求めることなく、却つて、その反對を主張した。

辨證法は、社會生活の問題の上に、全く新しい光を投げた。例へば、私有制について考へる場合、ユートピスト達は、それが維持さるべきものであるか、卽ち、それが人間の本性に合するものであるか、否かについて、甚だ多くの論爭を交へた。しかるにマルクスは、この問題を具象的地盤の上に立てたのである。卽ち、所有權の形式及びその關係は、生產力の發達によつて規定される、生產力の特定の發達段階には、所有權の或る形式が對應し、生產力の他の發達段階には、他の所有權の形式が對應する。この問題の絕對的解決なるものは存在せず、また存在することを得ない。けだし、一切は運動し、變化するからである。「理性は沒理となり、恩惠は害惡となる」のである。

思惟の方法としての辨證法は、人間の頭腦內における運動の恒久的過程を描寫する矛盾の論理學である。しからば、何故にこれを辨證法と名づけたか。ヘーゲルは、意識の進行を哲學的對話の進行と比較しつゝ、これを命名したと言はれてゐる。――人間の生活は對話に類似してゐる。生活年齡と生活經驗との移るに從つて、人間及び自然に關する、われわれの見解が、漸次に改態し變化するのは、恰も對話者の意見が內容に富み、暗示に富める對話の經過において、然るのと趣きを一にする。われわれの生活觀及び世界觀のかゝ

る不隨意的な、必然的な改態によつてこそ、經驗は成立するものなのである。されば〜ーゲルは、思惟又は意識の進行をば、哲學的對話の進行と比較しつつ、前者を辨證法、または辨證法的運動といふ語で呼稱したのである。とはいへ、この語はすでにプラトー、アリストテレス及びカントによつて種々なる意味において用ひられた。が、何れの體系においても、〜ーゲルの體系における程、包括的な意義をもつてはゐないのである。

唯物辨證法についての概念は、以上の說明によつて、ほゞ明かとなつたであらう。しかも、この唯物的辨證法の確實性を裏書する事實が、最近の生物學の發達によつて現はれつゝあるといふことを附記しなければならぬ。卽ち、生物學の最近の發達過程において、漸次的變化のみを認める進化論は、その地步を失ひはじめてゐるのである。例へば、フーゴー・ド・フリースによつて立てられた『突變說』は、種の飛躍的發達の學說に外ならぬといふことを指摘すれば、このことが明白となるであらう。この卓越せる自然研究者の見解によれば、ダーウインの進化論の弱點は、種の發生が漸次的變化によつて說明し得られるといふ思想の中に存する。そして、漸次的變化の學說が實驗的研究に面白からぬ影響を及ぼしたことを、ド・フリースは說いてゐるのである。

「革命の代數學」たる辨證法は、〜ーゲルにあつては、その唯心論のゆえに、白熱せる實際生活の問題に應用されるまでには至らなかつた。のみならず、その哲學の中に保守主義の精神を注ぎ入れたに反して、マルクスにあつては、打ち克ちがたき力をもつた批判の武器として採りあげられた。マルクスは言つてゐる、『辨證法は、その神秘化された形式において、ドイツに流行した。それは現存せるものを謳歌するやうに思はれたからである。しかるに、その合理的形態においては辨證法が、有產階級及びその學問的代表者を惱ましし、恐れさせた所以は、それが現存せるものの肯定的理解の中に、その否定

の、必然的沒落の理解を含み、一切の生成せる形式をば、運動の流れにおいて、卽ち、その經過的な方面から把握し、何物によつても動かさることゝなく、その本質において批判的であり、革命的であるからである。」(註)

(註)「資本論」第一卷第二版への跋文

第三章　マルクス主義の社會學

一、唯物史觀

マルクス主義の社會學とは「唯物史觀」または「史的唯物論」といふ名のもとに知られてゐる學說である。マルクスとエンゲルスとは、この天才的理論によつて、複雜多岐な社會生活及び階級闘爭の、最も混亂した問題の中にあつて、明確なる方向を指示した。エンゲルスは、この唯物史觀と剩餘價値說とを以て、マルクスの二大發見であるとなし、これによつて始めて社會主義が科學となつたと言つてゐる。

前に述べた如く、古い唯物論が不徹底であり、不完全であり、一面的であることを認識したマルクスは、社會科學を唯物論的基礎に一致せしめ、それをこの基礎に對應して、再建築せねばならぬ必要を痛切に感じた。一般に唯

物論は、實在から意識を說明するものであつて、その反對ではないのであるから、唯物論を人間の社會生活に適用するならば、社會的意識は社會的實在から說明されねばならぬ。マルクスは言つてゐる、『工藝學（テクノロジー）は、自然に對する人間の能動的態度、人間の生活の直接的生產過程、そして、これと同時に、人間の生活の社會的條件と、それから生ずる精神的表現とを明かにした。』(註)と。そしてマルクスは、人間社會とその歷史の上に押し擴めた唯物論の根本的規定の完全なる公式を、經濟學批判の序文において言ひ現はした。卽ち、

『人間は、その生活の社會的生產において、一定の、必然的の、彼らの意志から獨立した關係に、卽ち彼らの物質的生產力の一定の發展段階に對應するところの生產關係に入りこむ。これらの生產關係の總和は、社會の經濟的構造、法制的、政治的、上層建築がその上に築かれ、またそれに一定の社會的意識形態が對應するところの眞の土臺を形成する。物質的生活の生產方法は、社會的、政治的、精神的生活過程一般を條件づける。人間の意識が、その存在を決定するのではなくして、逆に人間の社會的存在が、その意識を決定するのである。その發達の一定段階において、社會の物質的生產力は、今までそれが、その中に發達し來つたところの現存の生產關係、或ひはその法律的表現にすぎないところの所有關係と矛盾するに至る。これらの關係は、生產力の發展形態からその桎梏に變化する。こゝにおいて社會革命の時代が來る。經濟的基礎の變化と共に、巨大なる上層建築の全部が、徐々に、或ひは急激に變革する。かゝる變革の觀察に當つては、われ〳〵は常に經濟的生產條件における自然科學的に正確に論證し得られる物質的變革と、人間がその中にあつてこの衝突を意識し、且つこれを鬪ひ終るところの、法律上、政治上、宗教上、藝術上、または哲學上の、約言すれば觀念上の諸形態と區別

（註）「資本論」第一卷

せねばならない。

人は、個人が如何なるものなるかを、その自ら考ふるところに從つて判斷し得ないと同樣に、かゝる變革の時代をその意識によつて判斷することは不可能である。反對に、この意識をば物質的生活の矛盾、社會的生產力と生產關係との間に存在する、衝突から說明しなければならない。一つの社會組織は、すべての生產力が、その組織內において、餘地ある限り發展を成し遂げたのちでなければ、決して滅亡するものではなく、また新たなる、より高度の生產關係は、その關係の物質的存在條件が舊社會自身の胎內において孕まれ終るまでは、決して舊社會組織にとつて代るものではない。それ故に人間は常にたゞ自ら解決し得る問題を問題とするものである。何故といふに、一層正確にこれを觀察するならば、問題そのものは、これを解決すべき物質的條件が存在してゐるか、或ひは、少くともその生成の過程にある場合にのみ、始めて發生するものであるからである、極めて大まかに言へば、アジア的、古代的、封建的及び近代ブルジョア的の生產方法を以て、社會の經濟組織の進步の段階となすことができる。そしてブルジョア的生產關係は、社會の生產過程の最後の敵對的形態である。』

これが、いはゆる唯物史觀の公式とよばれるところのものである。この唯物史觀の發見、卽ち、社會的現象の領域への唯物論の適用は、從來の歷史觀の二大缺陷を除去した。第一に、從來の史論は、人間の歷史的行動の觀念的動機を觀察するに止まり、これらの動機が何によつて生じたかを研究することなく、社會組織の發展の背後に橫はる客觀的法則を見出すこともなく、また物質的生產の發展の段階における、これらの關係の根本を探究することもしなかつた。第二に從來の史論は、大衆の活動を看過してゐたのである。これに反して、唯物史觀は、自然科學的正確さをもつて大衆の生活に影響を及

ぼすところの社會的條件と、これらの條件の中に發生しつゝあるところの變化とを研究することを可能ならしめたのである。マルクス以前の社會學と『書かれたる歴史』とは、せせいぜい事實の集積を仕上げたものに過ぎず、歴史的過程の若干の斷片的局面を表現する以上に何事をもなし得なかつた。マルクスは、社會の經濟的組織の發生、發展及び沒落の過程の包括的な、全面的な研究の方法としての唯物史觀を提示し、そしてこれらの全體の中に含まれる一切の矛盾的傾向を認めて、社會の諸階級の生活及び生産を正確に決定し得る條件にまで到達したのである。

かくの如くにしてマルクスは、社會科學における主觀主義を排すると共に、或る指導的思想の選擇及び説明における氣まぐれを排した。かれは、すべての思想と社會の生産力の狀態の中に現はれる、すべての異つた傾向との根據を曝露した。人類は、彼ら自身の歴史を作るのであるが、マルクスはその人類の動機、殊に大衆のそれを決定するものが何であるかを闡明したのである。この方法によつて、歴史に含まれるすべての矛盾の中に一貫して存在する決定的の法則を追究しながら、マルクスは歴史の科學的研究方法を指示したのである。

二、階級鬪爭説

如何なる社會においても、その社會の若干の構成員の努力が矛盾に滿ちてゐるものだといふこと、歴史は、國と國、または社會と社會との間においても鬪爭が行はれてゐるのみならず、その内部においても鬪爭の存在すること、しかして歴史は、平和と戰爭、革命と反動、沈滯と急速なる進歩或ひは沒落の周期的交替から成るといふこと、――これらは、すべて周知の事實であるが、マルクスは、この一見迷宮と混沌の如く思はれる社會の中に法則を發見

する端緒を與へた。この端緒とは、卽ち階級鬪爭の理論である。

われわれは、一定の社會のすべての成員、若しくはすべての集團の慾求の總和を研究することによつてのみ、これらの慾求の結果を科學的に決定し得るのである。だが、對立する慾求の根原は、社會が分裂してゐるところの諸階級の各々の地位と生活條件との相異の中に存在する。『從來のすべての社會の歷史は、階級鬪爭の歷史である。（原始社會の歷史を除いては――とエンゲルスは附け加へてゐる）自由人と奴隷、貴族と庶民、地主と農奴、親方と職人、簡單にいへば抑壓者と被抑壓者とは永久に、相互に對抗する位置にあつて、或ひは公然の、或ひは穩然の、絕ゆることなき鬪爭を續け、この鬪爭は、全社會的建物の革命的再建築に終るか、或ひは相爭ふ階級の共倒れに終るをもつて常とした。……滅亡した封建社會の懷から出て來た近代ブルジョア社會は階級的矛盾を絕滅しはしなかつた。それは單に、舊き階級の代りに新たなる階級を、新たなる抑壓の條件及び新たなる鬪爭の形式をうち立てたにすぎない。しかしながら、われわれの時代、ブルジョアジーの時代は、階級的矛盾を單純化した點において、他の時代と異つてゐる。社會は、いよ〳〵益益二つの大いなる相反する陣營に、相互に對立する二大陣營に、ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級に分裂しつゝあるのである。』（註）

フランスの大革命以來、ヨーロッパの歷史は、多くの國において事件の眞實の基礎、卽ち階級鬪爭を特に明確に露出した、すでにフランス王制復古の時代においてさへ、多くの歷史家は事件を一般化した場合に、フランスの歷史全體を理解する鍵として、階級鬪爭を認めざるを得なかつた。そして最近のブルジョアジーの完全なる勝利の時代、卽ち議會制度が設けられ、選擧權が擴張され、廉價な日刊新聞が大衆の間に讀まれるに至つた時代、そして有力な勞働團體及び傭主の團體が現はれる時代、かかる時代には、更に一さう

（註）マルクス、エンゲルス「共產宣言」

明瞭に、階級鬪爭が事件の原動力であることを示してゐる。それはしば〳〵平和的な、立憲的な形態においても現はれてゐる。マルクスは、その多くの歴史的著作において、各階級の位置を解剖し、それによつて、すべての階級對階級の鬪爭が、何故に、また如何にして、政治的鬪爭であるかを示した。次にその代表的な一句を引用しよう。『今日ブルジョアジーに對立するすべての階級のうち、たゞプロレタリアートのみが眞實の革命的階級である。他のすべての階級は大工業の發達と共に沒落し、絶滅しつゝある。プロレタリアートは、大工業自身の產物である。中間層、卽ち小工業家、小商人、手工業者及び農民等は、中間層としての、その存在を滅亡から救はんとしてブルジョアジーと鬪爭してゐる。從つてかれらは革命的ではあるが保守的である。さらにかれらは反動的でさへある。かれらは歴史の車輪を後に返さうと努めてゐるのだ。もし、かれらが革命的であるとすれば、それは彼らがプロレタリアートの列に移らんとする限りにおいてであり、かれら自身の利益ではなく、その將來の利益を擁護せんとする限りにおいてであり、プロレタリアートの見地に立つために、かれら自身の見地を放棄せんとする限りにおいてである。』(註)

マルクスは、右の如く、個々の階級を更に、また階級内の各種の集團及び層の地位を分折した。彼は、それによつて歴史的發展のすべての合成力を測定したのである。そしてこの方法のみが、歴史の唯物論的な取扱である。

唯物史觀は、すでに明かな如く、社會の構成ならびに變革、卽ち一言にしていへば、歴史の發展法則を說明するものであるが、その歴史的變化の究極の原因を生產力に求めるものである。社會は生產力を基本として、これに適應する生產關係が形成せられ、その生產關係の總和が全社會の基礎たる經濟的構造を形成し、この基礎の上に、すべての觀念上の諸形態が形成されてゐ

(註)　前揭書

る。しかして生産力の變化は、必然的に生産關係の變化を招來し、生産關係の變化は必然に、その總和たる全經濟的構造を變化する。それはまた必然に、その基礎の上に立つてゐるところの觀念諸形態に變化を齎すのである。即ち、唯物史觀によれば、生産力が、全社會構成乃至社會變遷の原動力であつて、それの變化に伴つて、全社會は、或ひは徐々に、或ひは急激に變革されるのである。しからば、生産力とは如何なるものか。マルクスはいふ、『勞働の生産力は、多樣なる事情により、就中、勞働者の墾練の平均程度、科學及びその技術上における實用性の發展段階、生産過程の社會的組織、生産手段の範圍及び作用能力により、且つもろ〳〵の自然事情によりて規定される。例へば、同一分量の勞働も、豐作の場合は八ブッシェルの小麥に、凶作の場合は、僅かに四ブッシュルの小麥に表示され、同一分量の勞働が、豐富なる鑛山では、貧弱なそれよりも、より多くの金屬を提供する等々。ダイヤモンドは地

殼にめつたに存在しない。それ故にその發見のためには、平均して多くの勞働時間を必要とする。』(註)

生産力の意義は、右の引用におけるマルクス自身の言葉によつて明瞭であらう。たゞ、しかし、マルクスは、この「生産力」なる用語を用うべき場合に、ある時は「生産方法」なる言葉をもつてし、ある場合には「生産機關」なる用語を用ゐてゐる。勿論、これらの言葉はマルクスの經濟學において、各々異つた意味を有するものであるが、「生産方法」も「生産機關」も根本において生産力によつて決定されるものであるから、そこに矛盾はないのである。

然らば、唯物史觀において『制約(ベディングン)する』または『決定(ベスチンメン)する』とは、如何なることを意味するか。これに對する解答は、エンゲルスがその晩年において、ある人物に宛てた書翰の中に見出される。即ち、『唯物史觀によれば、歴史における究極の決定要素は、現實の生活の生産及び再生産である。マルク

(註)「資本論」第一卷第一章

スも私も、これ以上を主張したことはない。もし何人かゞあつて、經濟的要素をもつて唯一の要素なりと偏して解するならば、それは唯物史觀の命題を、無意味な、抽象的な、荒唐無稽な言辭としてしまふものである。經濟構成は基礎である。『政治的、法律的、哲學的、宗教的、文學的、藝術的等々の發展は經濟的基礎に基いてゐる。しかし、これらは皆相互に影響し合ひ、また經濟的基礎に影響を及ぼす。經濟的狀態のみが唯一の能動的な原因であつて、その他に受動的な要因にすぎないといふのではない。否、こゝには究極において自己を貫徹する經濟的必然性を基礎とした交互作用があるのだ。』

このように、唯物史觀はいわゆる上部構造を經濟的土臺の受動的結果とのみ見るものではない。上部構造は經濟的土臺を基礎として成立つが、それ自身の相對的獨立性と內的合法則性とをもち、逆に經濟の上に影響を及ぼし、その發展を形式づけ、促進したり、遲らせたりするものである。すなわち、政治的要因や意識やが社會の發展において演ずる役割を唯物史觀は決して否定するものではないのである。吾々は、われ〳〵の歷史を作る。而し、それは極めて限定された前提のもとにおいてである。これらの中、經濟的のものが究極の決定者である。が、政治的條件その他人間の頭腦の中に去來するところの傳統の如きも決定的なものでないが、しかし一つの役割を演ずるものである。』(註)

(註)ジュダルケンプルダ宛の手紙

第四章　マルクス主義の經濟學

一、マルクス經濟學の範圍と目的

マルクス經濟學の對象は、近代社會、卽ち資本主義社會の生產方法たる資本家的生產方法であつて、その目的は、近代ブルジョア社會の經濟的運動法則を曝露することにある。彼は資本論の序文において言つてゐる、『私の著述の究極の目的は近代社會、卽ち資本家的社會の經濟的運動法則を曝露することにある。』と。卽ち、マルクス經濟學の內容は、あらゆる時代のあらゆる民族に共通なる生產形態の研究ではなく、一定の歷史的に決定された社會の生產關係を、その發生、發展、沒落において研究することである。

今日の社會は、その富の大部分が商品から成つてゐることを、その特徵としてゐる。商品とは、その直接の生產者なり、かれの關係者なりが、自己の使用を目的とせず、他の生產物と交換せんがために作りだすところの生產物である。從つて、生產物を商品たらしめるところのものは、その自然的性質ではなくて、社會的性質である。例へば、原始的農民の家で、自家用の麻糸を織るために、麻を紡いで麻糸を作るとする。この場合、麻糸は使用物であつて、決して商品ではないのである。これに反して、ある紡績業者が、隣村の農家の小麥と交換する目的で麻糸を作り、または製造業者が販賣の目的をもつて、日ごとに何百斤かの麻を紡がせるとすれば、この場合の麻糸は商品なのである。もちろん、この場合といへども、麻糸は使用物であるには相違ないが、しかしそれは、或る特種の社會的役割を演ずべき使用物であり、換言すれば、交換せらるべき使用物である。そこで麻糸が商品であるかないかは、その社會的役割、または社會的機能によつて定まるのである。何れにしても、麻糸の現物形態に變りのないことはいふまでもない。

資本主義社會においては、生産物は殆どすべて商品の形態をとる。もちろん、現在ではまだ、すべての生産物が悉く商品であるといふわけではない。しかしそれは、今日もなほ資本制以前の生産方法が殘存してゐる結果であつて、この殘存を除外すれば、すべての生産物が商品化してゐるのである。そこで、資本主義社會の生産方法を理解するためには、商品の性質を明かにしなければならぬ。卽ち、われわれの研究は、まづ商品の研究から始まらねばならぬ。かくしてマルクスの經濟學は商品の分析から初められたのである。

二、價　値

1、商品とは何か？　マルクスはこれを次の如く規定した。商品とは、第一に、人間の何らかの慾望を滿足せしめるところのものである。第二に、それは他のものと交換されるものである。物の有用性はその物を使用價値たらしめる。交換價値（若しくは單に價値）は、何よりもまづ、ある種の使用價値の一定量が、他の種類の使用價値の一定量と交換される際の關係であり、比例である。日々の經驗は、かゝる交換の幾百萬乃至幾千億が、ありとあらゆる種類の、そして互に比較し得られない使用價値を、絶えず相互に比較してゐることをわれ〳〵に示してゐる。しからば、これらの社會關係の一定の組織内において、絶えず相互に比較せらるるところの多種多樣の物のすべてに共通なるものは何か。いふまでもなく、それは、これらが等しく勞働の生産物であるといふことである。勞働の生産物を交換することによつて、人間はあらゆる勞働の種類を相互に比較するのである。商品の生産は社會關係を編成するものである。この組織のもとにおいて、個々の生産者は各種の財貨を作りだす。しかして、かれらの財貨は交換の際に相互に比較される。以上の理由によつて、すべての商品に共通なるものは、一定の生産部門における具體

的勞働でもなく、一種類の勞働でもなく、それは抽象的なる人間の勞働である。換言すれば、人間の勞働一般である。あらゆる商品の價値の總額に表現された社會の全勞働力は、等しく人間の勞働力である。何億の交換事實がこれを證明してゐる。從つて、個々の商品は、單に社會的に必要な勞働時間の一定の分子にすぎぬ。價値の代償は、社會的に必要なる勞働の量、あるひは商品、卽ち使用價價を生產するために、社會的に必要な勞働時間の分量によつて定まるのである。人間は、その異種類の生產物を互ひに交換することにおいて、かれらの種々なる勞働を互ひに人間勞働として平等視するのである。かれらは、そのことを意識してゐない。しかしかれらは、實際にこれを行つてゐるのである。(註)

2、價値とは何か？　それは二人の人間の關係であると、或る古い經濟學者は言つた。しかし、それには、かう附け加へなければならない。――物の外

(註)「資本論」第一卷第一編第一章を見よ

皮で包まれた關係と。價値の性質は、たゞ一定の歷史的社會組織の、社會的生產關係の體系の見地、及び幾十億回となく繰返される集團的な交換現象の中に現はれるところの關係の體系の見地からのみ理解することが出來る。(註)價値としての商品は、單に疑結せる勞働時間の一定數量にすぎないのである。

しからば、かゝる商品の價値の大きさは如何にして計られるか。それは商品の中に含まれてゐる價値形成要素、卽ち勞働の分量によつてこれを計る。そして勞働の分量は、勞働の時間によつて秤量されるのである。かくの如く、商品の生產に支出せられた勞働時間がその價値を決定するとすれば、人は怠惰であればある程、不熟練であればある程、かれの生產した商品の價値は、ます〳〵大きくなるかの如く考へられるかも知れない。しかし、こゝにいふ勞働とは、個人的な勞働ではなく、社會的勞働なのである。しからば、社會的勞働とは如何なる勞働であるか。商品生產は、諸々の勞働の一組織である。

(註)レーニン「マルクス、エンゲルス、マルクス主義」

商品生産のもとにおいては、これらの勞働は、互ひに獨立してゐはするが、やはり一定の社會的連絡をもつて行はれてゐる。商品界の諸價値の中に表現される社會の總勞働力は、無數の個別的勞働力から成立つてゐるが、こゝではすべて一樣なる人間勞働力と見做される。そして、それらの個別的勞働力の各々は、それが社會的の平均勞働力たる性質を有し、また、かくの如き社會の平均勞働力として代用し、從つて、一商品の生産には、平均的に必要なもしくは社會的に必要なる勞働時間のみが、必要とされる限り、何れもみな同一なる人間勞働力である。しかしてその社會的に必要なる勞働時間とは、現在における社會的標準をなす生産條件と、勞働の熟練及び能率の社會的平均程度とをもつて、何らかの使用價値を産出するに必要なる勞働時間を指すのである。從つて、勞働の生産力が變化すれば、社會的に必要なる勞働時間も變化し、價値も同樣に變化することとなる。

商品の價値の大きさが、その生産に支出された勞働の分量によつて決定されるといふことは、マルクス以前にも、すでにリカルドが認めてゐたところである。けれどもリカルドは、價値としての、商品の中に伏在する勞働の社會的性質を看取し得なかつた。同樣にまた、彼は商品の價値を形成する勞働方面と、その使用價値を形成する勞働方面とを明確に區別することができなかつた。商品は、すでにわれ〳〵が見た如く、使用價値及び價値を有つてゐる。ところで、商品の素材は自然が供給する。が、商品の價値は勞働が作る。そして使用價値もまた勞働の結果である。しからば、勞働は如何にして價値を作り、また使用價値を作るか。元來、勞働は、一面において一般的、人間勞働力の生産的支出として、他面においては、一定の目的を達するための一定の形態をとつた人間行爲として、吾々の眼に映ずる。そして前者は人間のあらゆる生産的活動の共通要素であり、後者は人間の生産的活動が異な

るにつれて異るものである。例へば、こゝに鍛冶勞働と農耕勞働とがある。これらは、何れも一般的人間勞働力の支出を意味する。この意味においては兩者は何らの差異もない。けれども、兩者の目的は全く異り、その作業の樣式、對象、要具及びその結果もまた異る。商品の中には、この二方面の勞働が含まれてゐる。マルクスはこれを『商品に含まれる勞働の二重性』(註)と呼んだ。

3、價値の創造者としての勞働　一定の目的を達するための、一定の形態をとつた人間行爲、即ち具體的な勞働は、種々雜多なものであつて、それが使用價値を作るのである。しかも、その種々雜多なることが商品生産の根柢となるのである。何故なら、各種の商品は、相互に異つてをればこそ交換される。小麥を小麥と交換し、鎌を鎌と交換するものはない。小麥と鎌と對立して、はじめて交換が行はれる。各々の使用價値は、それが性質の異つた有

(註)「資本論」第一卷

用勞働を體化する限りにおいてのみ、商品として對立することができる。

しかるに、價値としての商品は、性質上ではなく、分量上においてのみ異なるものである。そこで次のやうに言ふことができる。――商品は使用價値として異なるが故に交換され、同時に、價値として等しいが故に、互ひに比較され、一定の數量をもつて對立せしめられる。そこで、一定の目的と一定の形態とを有する質的に異つた具體的勞働が價値を作るのではなく、あらゆる勞働部門を通じて平等無差別なる、一般的人間勞働のみが價値を作るのである。つまり、價値構成の點からいへば、各種の勞働はすべて單純なる平均勞働と見做される。即ち各人が平均的に、その身體組織内に有する單純勞働の支出と見做されるのである。

商品の價値の大小は、その生産上、社會的に必要な勞働時間によつて決定されることはすでに述べた。しかしながら、價値の大小は、この勞働時間で

言ひ表はされるものではない。われ〳〵は『この上衣の價値は二十ヤールの麻糸、または十匁である』とは言はないで、『この上衣の價値は四十勞働時間の金に等しい』といふのである。もちろん、上衣を單に上衣として見れば、それはまだ商品ではない。それを他物と交換しようとする時、始めて商品となるのである。從つて、商品の價値もまた、交換しようとする相手の商品と比較するまでは、表面に現はれない。即ち、商品の價値の大小は、他の商品との交換比例を通じて、始めて具體的に現はれて來る。ところが、ブルジョア經濟學は、しば〳〵この關係を顚倒して、商品の交換比例がその價値の大小を決定するかのやうに主張する。だが、この主張の不合理であることは、マルクスによつて立證されたのである。要するに、價値量と價値形態との關係は、交換の過程において說明されるものである。

商品生產の初期においては、生產物は時に應じて、こゝかしこ偶然的に交換されたにすぎない。この時代の特徵は、一商品を他の一商品と比較交換する單純な價値方程式、例へば 1 蓆子＝2 封度鹽 で示すことができる。マルクスはこれを單純なる價値形態、または個別的の價値形態とよんだ。ところが、これに反して、一個の生產物が最早例外的にではなく、習慣的に他の勞働生產物と交換されるやうになるや否や、價値表象は、例へば次の如くになる。(註)

1 頭牛＝
- 2 蓆の外套
- 1 蓆の劍
- 1 本の帶
- 10 足の草鞋
- 3 個の盃
- その他

右の如き價値形態をマルクスは綜合價値形態、または擴大された價値形態

(註) カウキー著高畠素之譯「資本論解說」に據る。

とよんだ。しかし商品生産は更に發展する。交換のために、從つて商品として産出される勞働生産物の數は益增大し、習慣上の交換は、益々多種類の商品に及んで行く。單に家蓄ばかりでなく、劍も帶も盃も皆、習慣的に交換される至る。そしてこれらの商品の中、通用の最も頻繁なるもの、例へば家蓄が他商品の價値を最もしばしば言ひ表はすことになり、遂には、それが他商品の價値を言ひ表はす唯一の商品となるに至る。この段階に達すれば、前記の方程式は次の如く轉換される。

2 着の外套
1 箱の劍
1 本の帶
10 尺の亞麻
3 個の盃
} = 1 頭の牛

マルクスは、これを一般的價値形態とよんだ。一般的價値形態の特徵は、

單一の商品が等價として役立ち、それが一般的等價となる點にある。この等價として役立つ單一な商品は、他の一般商品と同樣に、使用價値たると同時にまた、商品價値たることに變りはないが、他のすべての商品は、今や外觀的に使用價値として、この商品に對立し、この商品自身は、一般的及び單一的の價値現象形態、卽ち一般的人間勞働の社會的體現として通用する。かくしてこの商品は、今や他のあらゆる商品と直接交換し得るところの、從つて何人もそれを受入れるところの商品となる。そこで、他のすべての商品は直接に相互交換をする資格も見込もなくなつてしまふ。かくて二商品間の如何なる交換も、他のあらゆる商品價値の反射鏡たる、一般的等價を通してのみ行はれることになる。

4、貨幣の出現　種々なる商品の所有者が、各々異つた商品を相互に交換するやうになると、これらの商品の多くは、價値としての一般的商品種類と

比較される必要が生じてくる。かくして、これらの商品に對する一般的等價、卽ち貨幣の出現が必要となる。勿論、最初は唯一時的に、または偶然的に、ある商品が一般的等價の役目を演じてゐるに過ぎないが、やがて、ある特殊の商品に、この役目を割り當てることが便利になるや否や、等價形態は益々この特殊の商品と密着せねばならなくなつた。しからば、如何なる商品にこの役目が密着するかは、種々なる事情によつて定まるのであるが、結局、この一般的等價たる役目を獨占して貨幣となるものは貴金屬である。これについては、もちろん、裝飾品や裝飾材料が最初から人類の重要交換品であつたといふ事情も、一部の原因をなしてゐるであらうが、その主要なる原因をなすものは、金銀の自然的性質が、一般的等價の社會的機能に最もよく適合してゐるといふ事情である。卽ち金銀は、比較的不變の性質を有つてゐて、水にも空氣にも變化を受けることが極めて少いが故に、日常の使用においては全く不變と見られ、且つそれは意のまゝに分析綜合することができる。金銀の此の如き性質は、平等無差別なる一般的人間勞働を體化する上に、最も適したものとされる。言ひ換へれば、單に量的の差異のみで、質的の差異なき價値の量を表現する上に、最も適してゐるのである。とはいへ、金銀もまた、それ自身商品として他の商品に對立すればこそ、この一般的等價なる役目を獨占することができるのである。卽ち、金銀は、それが商品であればこそ貨幣たり得るのである。だから、貨幣の價値とその社會的機能とは、決して人間が勝手に作つたものではない。それが商品として交換過程の上に演ずる役目によつて貨幣となるのである。

貨幣の第一の機能は、價値の尺度として役立つことである。商品はすべて同質であつて、互ひに比較し得るものである。それは、しかし貨幣あるが故に然かるのではない。商品は、これを價値として見れば、何れも人間勞働の

體化である。それ故に商品は、何れも共通的に一定の同一商品を目安として秤量され得るのである。一定の商品は、かくして他のあらゆる商品の共通的價値尺度、卽ち貨幣となる。價値の尺度としての貨幣は、一切の商品に內在してゐるところの、價値尺度なる勞働時間の必然的な現象形態である。貨幣商品に言ひ表はされた商品の價値は、商品の貨幣形態、卽ち價値である。例へば、1瓩の上衣＝10瓩金といふが如きである。マルクスは、『資本論』において金が唯一の貨幣商品であると假定した。事實、今日の資本制生產のもとにある諸國においては大抵金が貨幣商品となつてゐるのである。

貨幣はまた、價格標準としての機能を有する。各商品は、その價格表象においては、一定量の金として考へられる。そこで、各々異つた分量の金を相互に秤量することが必要になつてくる。かくして、諸價格の標準を作りだす必要が生ずるのであるが、金屬はこの標準を自然に具備してゐる。それは卽ち金屬の目方である。多くの國々において、價格標準の本來の單位名として金屬の重量名をそのまゝに採用した。例へば、イギリスのポンド、フランスのリーヴル、古代ギリシャのターレス、ローマのアスなどがそれである。

價値尺度と價格標準との相違は、價値變動に對す双方の關係を見れば明かである。今假りに價格標準の單位が十グラムの金とする。金の價値はどうであらうとも、二十グラムの金の價値は、常に十グラムの金の二倍であるに相違ない。從つて金の價値の高下は、價格標準の上には何らの影響を及ぼすものではない。ところが、金を價値尺度として見做し、上衣一着の價値が十グラムの金に等しいとして見る。今、金の價値が變動した結果、從來と同一な社會的に必要な勞働時間をもつてして、從來に二倍する金を產出するに至つたが、一方裁縫勞働の生產力には何らの變化も生じないとせよ。しからば、上衣の價格は二倍に增進して、二十グラムの金に等しくなる。卽ち金の價値變

動は、その價値尺度たる機能に反應するのである。

價格なるものは、上述の如く商品の價値量の貨幣名であるが、それはまた、商品と貨幣商品たる金との交換比例の表象である。商品の價値は、決して單獨にそれ自體として現はれるものでなく、交換比例を通して現はれる。しかし、この交換比例は價値量によつて影響されるばかりでなく、また種々なる事情によつて影響される。かくして價格と價値量とは一致しないことがあり得るのである。

三、剩餘價値

、二つの商品流通形態　資本主義社會においては、二つの商品流通形態が存在する。即ち、「單純なる商品流通形態」と、「特殊なる流通形態」とである。前者は商品――貨幣――商品といふ方式で現はされるところのもので

あつて、つまり購買せんがための販賣である。例へば、農夫は、自己の勞働生產物ではあるが、自己にとつては非使用價値である野菜を貨幣と交換し、その貨幣をもつて、自己にとつて使用價値である醬油と交換する。しかしてその醬油は農夫の手で消費されてしまふ。從つてこの流通は、これで終了し、農夫の一たび得た貨幣は、更に農夫の手から去つて行くのである。これを要するに、この流通形態においては、全く消費を目的とした交換が行はれる。そして、この單純なる商品流通形態によつては、兩端の商品は原則としてその價値を等しくするものである。即ち或る一定量の社會的必要勞働を含む野菜は、等量の社會的必要勞働を含む貨幣と交換され、その貨幣が更にまた、等量の社會的必要勞働を含む醬油と交換される。即ち、相等しき價値が交換されるのである。從つてこの流通形態の目的とするところは交換價値でないことは明かである。否、それは使用價値に外ならない。

しかるに、これに反して、賣るために買ふといふ特殊なる商品流通形態は、消費を目的とするものではない。この循環の終點は、商品ではなくて貨幣である。最初流通部面に投ぜられた貨幣は、支出されたのではなく、前貸しされたものにすぎない。だから貨幣は、再びもとの所有者の手に戻つてくるのである。しかもこの循環は、これだけで終つてしまふのでなく、最初前貸された貨幣は、その所有者の手に戻り、更に流通部面に投ぜられて、結局またもとの所有者の手に復歸する。かくして無限に、この循環運動は反覆されるのである。卽ち、この流通形態における貨幣の運動は實に無限である。これは何故であらうか。われ〳〵は、この第二の流通形態について、一層精密に考察する必要がある。

單純なる商品流通形態の目的は明瞭である。それは卽ち、使用價値乃至消費にある。しかるに、第二の特殊なる商品流通形態の目的及びその原動力は、交換價値にあるのだ。貨幣――商品――貨幣なる流通形態は、一見全く無意義なものに見える。例へば、十圓で買つた砂糖を十圓で賣つたとしたらどうであるか。それは買つても買はなくても同じことではないか。だから、十圓で賣るために、十圓で砂糖を買ふ者はない。賣るために買ふといふ流通を意義あらしめるためには、その始點において支出せられる貨幣額と、終點において受取らるゝ貨幣額とは異つてゐなければならない。ところが、すべての貨幣額は、すでに述べた如く分量上の差異を有するのみである。そこで貨幣――商品――貨幣なる循環は、その始點の貨幣額よりも終點の貨幣額がより大である場合にのみ意義を有つことになる。この貨幣額の增殖、卽ち交換價値乃至價値の增殖こそ、この流通形態の原動力なのである。これを一言にして言へば、賣るために買ふのである。

今やわれわれは、マルクス經濟學における最も重要な發見である處の剩餘

價値學説に接近した。すでに明かなる如く、貨幣――商品――貨幣なる流通の目的は、始點の貨幣額(價値)よりも終點の貨幣額(價値)の增大にあるのであるが、この增大せる部分だけの價値を稱して剩餘價値といふのである。今これを實例について説明しよう。先にあげた砂糖の例について言へば、十圓の砂糖を更に販賣する目的で買ふのは、それをより高く、例へば十二圓で賣るためである。――この場合、砂糖として販賣するか、または菓子として販賣するかは、暫く問題でない。要するに最初の貨幣額に更に幾何かの貨幣を附け加へることが目的である。これを公式で表はすならば、次の如くである。

貨幣――商品――(貨幣＋〔貨幣〕)

この最後に新しく附け加へられた〔貨幣〕は、最初投下された價値の利潤であつて、かゝる循環運動の終點に現はれるものであり、これこそが、マルクスの言ふところの剩餘價値に外ならない。かの、利潤、利子、地代等は、すべてこの剩餘價値の現象形態に外ならぬのである。

2、貨幣の資本化　さて、この剩餘價値は貨幣――商品――貨幣なる循環の決定的特徴をなすものであつて、それは、かゝる循環において資本と化するのである、資本は剩餘價値を生む價値である。かゝるものとしての資本は、前述の運動を前提としてのみ理解される。次にその然る所以を述べよう。

すでにわれわれは、資本なるものが剩餘價値を生む價値であり、資本の運動は貨幣の形態をもつて始まることを知つた。資本は、その運動上、最初の貨幣形態より、種々なる商品形態に轉化して、更にまた元の貨幣形態に再轉化する事實を見た。更にわれわれは、これによつてすべての商品、すべての貨幣が、必ずしも資本ではなく、たゞそれらのものが一定のの運動をなす時に、始めて資本となるといふ事實を認めることができる。しかしながら、この運動には、更に特殊の歴史的條件が必要である。われわれが、パンや上衣

の如き消費物を買ふために支出する貨幣は、決して資本ではない。それは恰も、われわれが自ら生産して賣る商品が、その取引上資本として作用するものでないのと同樣である。

3、剩餘價値の源泉　われわれは、資本の一般的公式を知つた。けれども、その剩餘價値がどこから生れるかはまだ明かでない。剩餘價値は、賣買行爲によつて作られるかのやうに見える。卽ち流通行程から剩餘價値が生ずる如くに見える。ところが、かゝる俗見は、餘りに原始的である。われわれは更に立入つて資本の一般的公式を觀察しなくてはならない。

資本の一般的公式は、商品を買ふこと、卽ち貨幣――商品と、商品を賣ること、卽ち商品――貨幣＋〔貨幣〕との二つの行爲から成り立つてゐる。しかるに、商品流通の法則に從へば、右の貨幣は、商品と同價値でなければならぬ。商品はまた、（貨幣＋〔貨幣〕）と同價値でなければならぬ。これは商品が自ら增大する場合、卽ちその消費中に本來有してゐる以上の價値を生む商品である場合にのみ可能である。そこで、若し價値の源泉たることを使用價値の特色とする一種特別の商品が發見されねばならぬ。換言すれば、消費することが直ちに價値の增大であり、從つて前記の貨幣――商品――貨幣＋〔貨幣〕が、同時に貨幣――商品――（商品＋〔商品〕）（貨幣＋〔貨幣〕）を意味するやうな商品が發見されゝば、剩餘價値の謎は解けるのである。

ところが、商品價値を作り出すものは、すでにわれわれが見た如く、人間の勞働のみである。從つて、上記の公式は、人間の勞働力が一つの商品である場合にのみ實現されるのである。

かくして人間の勞働力が商品として市場に現はれなければならぬ。しからば、勞働力を商品たらしめる條件は何であるか。すでに見た如く、商品交換の前提條件としては、商品所有者は、その商品に對して完全なる支配權を有

つことが必要である。そこで、勞働力が商品となるためには、その勞働力の所有者たる勞働者は、自由の人でなければならぬ。勞働力の所有者は、その勞働力を商品として持續しなければならぬ。かれはそれを賣り放してしまふわけにはゆかぬから、一定時間に亘つて、勞働力といふ商品を切賣りすることのみができるのである。でないならば、かれは賃銀勞働者ではなく、奴隷であり、商品所有者ではなく、商品になつてしまふではないか。

更に、勞働力が商品となるためには、いま一つの條件が必要である。使用價値なるものは、それが商品となるためには、所有者にとつて非使用價値でなければならぬ。故に勞働力もまた、一つの商品として市場に現はれるためには、その所有者たる勞働者にとつて、非使用價値でなければならぬ。ところで、勞働力の使用價値とは、要するに、勞働力以外の他の使用價値を作り出すことである。それにはまづ、勞働者が必要なる生産機關を支配するものでなくてはならぬが、勞働者が生産機關を支配するところにあつては、彼はその勞働力を販賣せずに、自らこれを使用し、その生産物を販賣するであらう。それ故、勞働力が商品となるためには、勞働者がその生産機關、殊にその中で最も重要なる土地から分離することを前提とする。これを要するに、勞働者は、如何なる點においても、自由でなければならぬ。即ち、一切の個人的隷屬から自由であるばかりでなく、同時に一切の必要なる生産機關からも自由でなければならぬ。この事が、實に貨幣所有者が、その貨幣を資本に轉化し得る豫備條件なのである。しかし、この條件は、天然自然に與へられたものでもなければ、また、あらゆる社會形態に固有のものでもない。それは實に長い間の歴史的發達の結果である。そしてそれは近代資本主義社會に固有のものである。

4、勞働力の價値　今やわれわれは、剩餘價値を作りだすところの商品が、

何であるかを知つた。しからば、その商品それ自體の價値は幾何であるか。それは他の商品と同じく、その生産上、社會的に必要なる勞働時間によつて決定されるのである。勞働力は勞働者の存在を前提とする。そして勞働者の存在は、また、一定量の生活資料を必要とする。故に、勞働力の生産に必要なる勞働時間とは、畢竟するところ、この一定量の生活資料の生産に、社會的に必要なる勞働時間に等しい。しかして、この生活資料の大小は、種々なる事情によつて決定される。例へば、勞働者の支出する勞働力が多ければ多いほど、その勞働時間が長く、その勞働の緊張が甚だしいほど、かれはその力の支出を恢復して、翌日もまた前日通りに勞働し得るために、益々多量の生活資料を要することになる。だから異つた國々における勞働者の慾望は、各國の自然的、文化的特質に從つて異る。が、要するに、勞働力の價値決定には他の商品の場合と異つて、歴史的及び道德的の要素が含まれてゐるのである。

言ふまでもなく、勞働者の生命には限りがある。しかし、資本は不死を欲してゐる。資本が不死であるためには、勞働者階級が不死でなくてはならぬ。即ち、勞働者の生殖が必要となる。だから勞働力の維持に必要なる生活資料といふ中には、同時に、その家族の扶養に必要なる生活資料も含まれることになる。さらに、勞働力の生産費の中には、勞働者の教育上の費用、即ち一定の勞働部門において、一定の熟練に達するために必要な費用が計上されなければならぬ。これらの決定的な原因によつて、一定の時期における一定の國の勞働者階級の勞働力の價値は、常に一定の大いさを有するのである。

以上において、われわれは、商品は如何にして交換され、賣買されるか、また貨幣は、如何にしてその種々なる機能をつくすか、そして勞働力なる商品が市場に出現すると共に、貨幣は如何にして資本に轉化されるか等の問題

を考察した。今やわれわれは、資本家が市場で買つた勞働力を、如何に消費し、利用するかを見なければならぬ。

5、資本家的商品生産の勞働行程　勞働力の使用とは、勞働そのものである。資本家の勞働力の賣手は勞働者である。資本家は自分のためにこの勞働者を働かせ、商品を作らしめることによつて、購買した勞働力を消費する。ところが、商品を生産する勞働には二つの方面がある。即ち、それは一方において、使用價値を作ると同時に、他方において商品價値を作るのである。使用價値を作る勞働方面は必ずしも商品生産のみに特有のものではない。これは社會形態の如何にかゝはらず、常に人類の生存上、缺くべからざる必要條件である。しかも勞働のこの方面には三つの要素が含まれてゐる。即ち、(一)人間が目的を意識し、目的に從つてする活動、(二)勞働對象、(三)勞働要具である。

そこで、勞働は先づ目的を意識し、目的に從つてする人間活動であつて、人間が自然物を自己の慾望を充すに適するやうな形態に作りかへることである。元來、如何なる勞働も、筋肉勞働であると同時にまた、腦髓及び神經上の勞働である。これについてマルクスは、適切にも次の如く言つてゐる。――『勞働する身體諸器官の緊張の外に、なほ注意として現はれる目的意思が、勞働の全繼續に必要である。しかしてこれは、勞働がその內容及び遂行樣式の上から、勞働者を沒頭せしめること少きに從ひ、即ち勞働者がその勞働をば自己の心身力の遊戯として樂しむこと少きに從つて、益々著しくなるのである。』(註)

次に、勞働者は一つの對象即ち勞働對象の上に勞働を仕向ける。その際、勞働者は、補助具を使用する。この補助具が即ち勞働要具である。かくして、勞働者が勞働要具を用ひ、その勞働對象に加工する結果生ずるところのもの

(註)　マルクス「資本論」第一卷第三編第五章

が、卽ち生產物である。この勞働要具と勞働對象とを總稱して、マルクスは、これを『生產機關』と名づけた。

勞働要具は、人類の發達上、最も重要なものである。生產上の樣式は先づこの勞働要具によつて決定される。勞働要具によつて決定された各生產方法は、さらにその特殊の社會關係を決定し、それに適應した法律上、宗敎上、哲學上、並びに藝術上の上部建築を與へる。

生產機關と勞働力とは、あらゆる生產方法のもとにおいて、使用價値生產の勞働行程の要素をなすものであるが、しかし、この行程の社會的性質は生產方法に從つて異るのである。われ〳〵は、こゝで資本家的生產方法のもとにおいて、この行程が如何なる形態をとるかを考察しよう。

商品生產者の立場から見れば、使用價値の生產なるものは、商品價値生產の手段であるに過ぎない。元來、商品は使用價値と商品價値との合成である。

故に、使用價値を作らなければ商品價値は生じないのである。だから、生產者の生產する商品は、第一の要件として人間の慾望を充すものであることを必要とする。言ひ換へれば、何人かに對して効用を有するものでなくてはならぬ。でないならば、生產者はこれを販賣することができない。しかも、商品が使用價値であるといふことは、生產者の營業行爲の終局目的ではない。それは生產者にとつては、いはゞ『必然の惡』にすぎない。かくして商品生產における生產行程は、一面において使用價値生產の行程であると同時に、他面において商品價値生產の行程である。卽ち、それは勞働行程と價値形成行程との合成である。このことは、商品生產一般について當てはまることであるが、商品生產の特殊なる形態たる資本家的商品生產の生產行程は如何なるものであるか。

資本家的商品生產においても、勞働行程の上には、本質上何等の變化も生

じない。一例として、獨立した機織業者について見よう。彼は織機を所有してゐる。彼は自らその糸を買ふ。そして隨時、隨意の方法でその勞働を營むことができる。生産物は彼の所有に屬する。ところが、彼がたま〳〵貧困に陷つた結果、その織機を人手に渡さなければならなくなつたとする。この場合、彼は如何にして生計をたてるか、勢ひ資本家に傭はれ、資本家のために働くの外はない。彼の傭主たる資本家は、彼の勞働力を買入れ、また織機や必要な糸を自ら購買し、この織機をもつて彼に糸を織らせる。資本家の買つた織機は、前の機織業者の賣却したものであつたかもしれない。さうでないにしても、機織業者は前に彼が獨立で經營した當時と同一の樣式をもつて糸を織るのである。だから、外部的にはその勞働行程の上に何等の變化も生じてゐないのである。

ところが、こゝに二つの重大な變化が生じた。といふのは、第一に、その機織業者は、最早從前のやうに自分自身のために働くのではなく、資本家のために働くやうになつたのである。資本家は、今や彼の勞働を監視し、彼が怠けたり投やりの仕事をしたりすることのないやうに注意する。第二に、前の機織業者の生産物は、最早、從前の如く彼自身の物でなく、資本家のものである。

資本が生産行程を支配するに至つた結果、勞働行程の上に與へる直接の影響は右の如くである。しからば、價値生産行程は如何？

6、價値增殖行程　まづわれわれは、資本家が買入れた生産機關を用ひ、買入れた勞働力によつて、自己のために生産せしむる商品の價値が幾何に上るかを計算してみよう。假りに資本家は、勞働力を日買するものとする。今勞働者の生存に必要なる生活資料は、社會的に必要なる勞働六時間で生産せられ、そして同一の勞働時間が貨幣三マルクに體現されてゐるものと假定す

る。資本家は、この勞働力を價値通りに購買するとすれば、一日の勞働の代價として、勞働者に三マルクを支拂ふわけである。そこで彼は、例へば綿糸紡績が有望だといふので、早速、それに從事しようと決心し、まづ勞働要具——こゝでは說明を簡單にするために、若干の紡錘と假定する——と棉花とを買込む。今、假りに、一斤の棉花の中には、社會的に必要な勞働が二時間含まれてゐるとする。卽ち、その貨幣價値は一マルクである。さらに、一斤の棉花から一斤の綿糸が作られるとし、棉花百斤を紡ぐごとに、紡錘一箇宛磨滅するものとしてみよう。最後に、紡錘一箇の價値を、二十勞働時間、卽ち十マルクとし、一勞働時間に棉花二斤宛紡がれるものとする。しかもこれらの生產は、常に社會的に必要なる平均的生產條件のもとに行はれるものと假定する。

さて、かゝる事情のもとに生產される綿糸一斤の中には、どれだけの價値が含まれてることになるであらうか。まづ、その生產に消費される棉花と紡錘との價値を考へて見る。この價値は增減なく、そのまゝ生產物に轉化される。棉花と紡錘との使用價値は、綿糸といふ異つた生產物になるが、しかしその價値には、變化がない。これは綿糸製造勞働に至るまでの行程を、假りに同一なる勞働行程の連續的部分の一として考へて見れば明かとなる。試みに、紡績業者が同時に、また棉花栽培業者であつて、棉花の收穫後、直ちにその紡績に着手するものとして見る。すると、綿糸は棉花栽培勞働及び紡績勞働の結果となり、その價値は、棉花を生產し、さらにこれを綿糸たらしめるについての社會的に必要な勞働時間によつて決定される。綿糸生產に必要なる、これら各種の必要なる行程が、右の如く同一人で經營される場合には問題はないが、若し、それが異つた人々の經營に屬するとしても、他の事情に變化なき限り、生產物の價値は、一人で經營する場合と少しも變らない。

要するに、加工をうける棉花の價値は綿糸の中に再現されるのである。同様のことが使用紡錘の價値についても云ひ得るのである。説明を單純にするため補助材料のことは、この場合問題外に置く、ところが、綿糸の價値には右の如く棉花及び紡錘から移轉された價値ばかりでなく、紡績勞働によつて棉花の上に加へられた價値も加へられてゐる。そこで、一勞働時間に二斤の棉花が紡がれ、そして一マルクには二勞働時間が含まれてゐるとすれば、一勞働時間は卽ち二分の一マルクなる價値を形成する。そこで、綿糸一斤の價値は次の如くになる。

棉花一斤(=1マルクス)+紡錘$\frac{1}{100}$摩(=$\frac{1}{10}$マルク)+$\frac{1}{2}$勞働時間(=$\frac{1}{4}$マルク)

これをマルクで言ひ表はせば、

$$1+\frac{1}{10}+\frac{1}{4}=1\text{マルク}\ 35\text{ペニヒ}$$

となる。

前の假定によれば、一時間に二斤紡がれるのであるから、六時間の綿糸生産額は、卽ち十二斤であつて、その價値は十六マルク二〇ペニヒに相當する。しからば、資本家はこれだけの綿糸を生産するに幾何を要したか。まづ、棉花十二斤(卽ち十二マルク)及び紡錘百分の十二個(卽ち一マルク二〇ペニヒ)及び勞働力三マルク、合計十六マルク二〇ペニヒを要したのであつて、生産綿糸の價値と同一である。これでは資本家は、折角勞働者を傭つて働かしたことが無駄になるわけである。なぜなら、資本家の買つた勞働力は、何等の剩餘價値も作りださなかつたからである。

ところが、資本家は、なか〳〵これで滿足するものではない。彼は勞働力の使用價値を全一日分買つたのだ。從つて彼は、全一日分の勞働の使用價値を充分に利用する權利をもつてゐるわけである。かれは勞働者に向つて、恐

らく十二時間の勞働を强制する。勞働者に十二時間働かせたのち、即ち一日の勞働の終りに、彼は再び計算する。すると、彼は今、綿糸二十四斤を得、その價値は三十二マルク四〇ペニヒである。そしてその費用は棉花二十四斤（即ち二十四マルク）紡錘百分の二十四個（即ち二マルク四〇ペニヒ）勞働力三マルク、合計二十九マルク四〇ペニヒである。即ち、彼は結局、32.4－29.4＝3マルク儲けたことになる。これが彼の剩餘價値である。彼は、この剩餘價値を『正當』だといふのである。しかり、彼はそれを得るために、商品交換の法則を破らなかつた。棉花も紡錘も勞働力も、すべて價値通りに買ひ、價値通りにその代價を支拂つた。たゞ彼は、これらの商品を享樂資料としてではなく、資本家的生産機關として消費したのである。しかも彼は、購買した勞働力の使用價値を、一定の限界以上に消費した。彼が剩餘價値を得たのは、その結果なのである。

商品生産制度のもとにおいては、生産行程は常に價値生産行程である。それは生産行程が生産者自身の勞働力で營まれても、また他から買入れた勞働力で營まれても、この點には差異がないのである。たゞ、一定の時點を超えると、價値生産行程は剩餘價値の産出、即ち價値增殖行程となる。剩餘價値が生産されるやうになるには、生産のために買入れた勞働力の價値をその生産物の價値で回收する點以上に、生産行程が延長されなければならぬ。

自分の畠を自分で耕す百姓も、自分の仕事を自分の計算で營む手工業者も、その消費生活資料の回收に必要なる時間を超えて勞働し得るものである。從つて、彼等もまた剩餘價値を作り、彼等の勞働も價値增殖行程たり得る。たゞ、この價値增殖行程が、他から買入れた勞働力で營まれるやうになつた時、初めて資本家的生産行程となるのである。そして、資本家的生産行程は、その性質上、最初から必然的に、且つ意識的に價値增殖行程である。

7、不變資本と可變資本　これまで見て來た如く、生産行程において消費された生産機關の價値は、そのまゝ生産物の價値に再現する。しかるに、勞働は單に價値を保存するばかりでなく、進んで新たなる價値を作り出すものである。尤も、この新たなる價値を作りだす勞働は、一定の時點までは、單に資本家が勞働力の購買に支出した價値を回收するにすぎない。けれども、この時點を超えると、勞働はさらに過剰の價値、即ち剰餘價値を作り出すのである。そこで、要するに、生産機關、換言すれば、原料、補助原料、勞働要具等を包括する資本部分は、生産行程において、その價値量を變更するものではない。マルクスは、これを不變の資本部分、或ひはより簡單に不變資本と名づけた。

これと反對に、勞働力に轉化される資本部分は、生産行程においてその價値を變更する、即ちそれ自身の等價と、その上、一つの過剰を、剰餘價値を生産する。この剰餘價値は、それ自身變化するものであつて、より大ともなれば、より小ともなり得る。この資本部分は、絶えず不變量から可變量に變化するものである。マルクスは、これを可變の資本部分、或ひは簡單に可變資本と名づけた。勞働行程の立場から見れば、客觀的及び主觀的因子として、即ち生産機關及び勞働力として區別される資本部分も、價値增殖行程の立場から見れば、可變資本及び不變資本として區別されることになる。(註)

8、剰餘價値率と利潤率　次に、勞働力の搾取程度を觀察しよう。こゝに五千マルクの資本があるとして、その中四千一百マルクを生産機關の購買に支出し、殘りの九百マルクを勞働力の購買に支出するとする。即ち、前者は不變資本であり、後者は可變資本である。ところが、この四千一百マルクの不變資本はまた二つに分れる。即ち、一つは生産行程毎に價値の全部を生産物に轉化するところの原料、補助原料であり、他は生産行程毎に、價値の一

(註)「資本論」第一卷第三編第六章

部を生産物に再現する道具その他のものである。だが、こゝでは説明の煩雑化を避けるため、かゝる差異を問題外とし、單純に、充用總資本の價値が生産物に再現するものと假定しておかう。

資本家は生産機關及び勞働力を購買して充用する。生産行程の終末には、前貸した資本の外に、なほ一定の剩餘價値が得られる。今、この剩餘價値が九百マルクであるとする。すると資本家は、不變資本＋可變資本＋剩餘價値＝4100＋900＋900＝5900マルクの生産物を得たことになる。その中四千一百マルクは移轉した價値であり、900＋900 卽ち一千八百マルクは新たに作りだされた價値である。

ところで、不變資本の價値の大小は、産出剩餘價値の大小の上に、何等の變化をも及ぼすものではない。勿論、生産機關なくして生産は行はれない。生産が長期間に亘れば亘るほど、益々多量の生産機關が必要となる。故に一定量の剩餘價値を生産するには、一定量の生産機關——勞働行程の技術的性質によつて左右されるところの——が必要である。けれども、この生産機關の價値如何は、剩餘價値の大小には何等の影響をも及ぼすものではないのである。今、私が三百人の勞働者を備ひ、その各人の勞働力の一日分の價値が三マルクであり、そして各人が一日に作りだす價値が六マルクであるとすれば、右の三百人が一日に産出する生産物の價値は、それに利用される生産機關の價値が二千マルクであらうと、四千マルクであらうと、或ひは八千マルクであらうとも、依然として一千八百マルクであつて、その中、九百マルクは剩餘價値である。生産行程における、この價値産出と價値變化とは、前貸不變資本の價値の大小によつて影響を受けるものではない。從つて、これらの兩行程を純粹の形で研究しようとするならば、不變資本のことは問題外において差支へないのである。たゞ、前貸資本の中、われわれの問題となるも

のは、可變資本のみである。まだ生産物價値のうち、われわれの關係するところは、勞働によつて作り出された價値、卽ち、充用可變資本と剩餘價値のみである。前の例で言へば、前貸資本に對する剩餘價値の比率は、900：900卽ち十割である。

可變資本の、かゝる比例的價値增殖、換言すれば剩餘價値の比例的大小を、マルクスは剩餘價値率と名づけた。勞働者が、一勞働日中に、その勞働力の價値、卽ち可變資本に等しい價値を産出しようとすれば、一定の時間勞働しなければならぬ。前にこれを六時間と假定した。この勞働時間は、勞働者の生活維持に必要なるものである。そこでマルクスは、これを必要勞働時間と名づけた。勞働者が、この必要勞働時間以上に働き、その勞働力恢復のための價値ではなく、資本家の手に歸すべき剩餘價値を作り出すところの勞働時間を、マルクスは剩餘勞働時間とよび、この剩餘勞働時間中に支出される勞働量を剩餘勞働量と名づけた。しかして、剩餘勞働の必要勞働に對する比率は、剩餘價値の可變資本に對する比率に等しいものである。故に、剩餘價値率は次の如く表はし得る。

$$\frac{\text{剩餘價値}}{\text{可變資本}} \text{ 又は } \frac{\text{剩餘勞働}}{\text{必要勞働}}$$

剩餘價値は、一定量の生産物によつて代表される。マルクスはこれを剩餘生産物と名づけた。故に可變資本に對する剩餘價値の比率は、生産物の一定の部分間の相互比例によつて表現され得るものでなくてはならない。けれども、この比例の研究においては、最早、新たに作り出された價値ではなく、完成された生産物が問題となるのであるから、われわれは前の如く不變資本を問題外におくことはできぬ。それは生産物價値の一部を構成してゐるからである。

次に剰餘價値率と利潤率との區別を述べる必要がある。恰も、價値對價格における と同一の區別が、剰餘價値對利潤の場合にも存在する。實際家たる、商品の賣買當事者にとつては、價値よりも價格が問題である。從つてまた、價格率のみが彼等の問題となるのだ。價格の法則を知ることは、商人にとつて、その計算及び投機のために必要である。これに反して、價格の根底をなす價値の法則は、單に學者の興味を牽くにすぎぬ。何となれば學者の任務は商品を安く買ひ、高く賣ることでなく、商品生產によつて生ずる社會的の連絡を研究することに存するからである。

同樣に、實際の資本家にとつては、剰餘價値ではなく、利潤が問題となる。彼等の目的は、資本對勞働の關係を研究することではなく、出來うる限り多大の利潤を獲得することにあるからである。しかも、この利潤がどれだけの勞働支出によつて作り出されるかといふことは、彼等にとつては、どうでもいゝ問題である。といふのは、利潤を作り出すものは彼等の勞働ではなく、貨幣である。それ故に、資本家は獲得した剰餘價値をば、その生產に必要であつた勞働量と對比する代りに、前貸されなければならなかつた貨幣量と對比する。剰餘價値增殖の運動を 商品——(資本+〔資本〕) で示すとすれば、資本家は貨幣に對する(貨幣)の比率で利潤を計算するのである。しかし、この比率は、決して可變資本對剰餘價値の比率と同一のものではない。資本家が生產上に前貸する貨幣量は、單に勞働賃銀のみでなく、工場建物、機械、原料、補助原料等、卽ち、マルクスが不變資本とよんだところの、すべてのものの代價が含まれてゐる。この一事からしてもすでに、利潤率は剰餘價値率とは異つたものであるといふ結果が生ずる。卽ち、剰餘價値率は、可變資本對剰餘價値なる公式で言ひ表はされるものであるが、利潤率の方は、不變資本プラス可變資本對剰餘價値で言ひ表はされるものである。そこ

で、利潤率が剰餘價値率と異るものでなければならないことは明かである。前の五千マルクの資本の例をとつて見よう。その中四千一百マルクは不變資本、九百マルクは可變資本、そして九百マルクが剰餘價値であつた。從つて、剰餘價値率は九百對九百、即ち十割であつた。しかるに、利潤率は五千對九百、即ち一割八分に當るのである。

これは、單に計算方法の違ひから生ずる區別であるが、此の如き純形式上の區別と異つた他の區別はまた、剰餘價値と利潤率との間に、生じ得る。剰餘價値は同一であつても、資本の組織が異なれば、――例へば同一の賃銀量に對して異つた資本量が配合されるとすれば――利潤率もまた當然に異ならねばならぬ。しかも、この資本の組織は、各生產部門の技術的性質、または技術上の發達程度の相違に從つて、必然にまた異つてくる。資本の技術的組織によつて決定され、その諸變化を反映するといふ方面から見た資本の價値組成をば、資本の有機的組織と名づける。そして社會的平均資本に比し、不動資本のバーセンテージが大きく、可變資本のバーセンテージが小さい資本は、これを高位資本の組成といひ、反對に社會的平均資本に比して、不變資本が相對的に大きい資本は、これを低位組成の資本とよぶ。最後に、社會的平均資本と一致した組成を有する組成は、平均組成の資本と名づけられるのである。

ところで、これらの組織上の差異が、利潤率の上に如何なる影響を及ぼすか。こゝに三つの企業があつて、それが各々異つた生產部門に屬するものと假定する、その一は、技術的に遲れてゐて、勞働者の人數の割合に機械を使用すること少く、大きな工場建物を必要としない。即ち、資本の有機組織が、低位に止つてゐる企業である。しかしてその二は、平均組成のものであり、その三は、生產技術が著しく發達してゐて、生產者一人に對する機械及び建物の價値が多額にのぼるもの、即ち資本の有機的組成が高位にある企業である。

今假りに、これらの三つの企業の何れにおいても、被傭勞働者の數は一百人、その一年の賃銀は何れも一千マルクとし、さらに剩餘價値率は、何れも一割であるとしてみる。この場合、三つの賃銀總計は、十萬マルク、剩餘價値總計も同樣に十萬マルクである。しかるに、Aなる企業の不變資本は十萬マルク、Bのそれは三十萬マルク、Cのそれは五十萬マルクであると假定せよ。すると、次のやうになる。(註)

企	資本 可變	資本 不變	資本 合計	剩餘價値	剩餘價値率 即ち可變資本對剩餘價値の比率	利潤率 即ち總資本對剩餘價値の比率
A	一〇〇、〇〇〇マルク	一〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇%	五〇%
B	一〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇%	二五%
C	一〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇%	一六%
合計	三〇〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇	一二〇〇、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	一〇%	二五%

(註) カウツキー「資本論解說」に據る

これによつてわれ〳〵は、若し商品が嚴密に價値通りに販賣されるとすれば、剩餘價値率は同一であつても、利潤率は著しく異ることを知るのである。だが、資本制生產のもとにおいては、かゝる利潤率の差異は、決して永續するものではない。元來、資本家が生產に從事するのは、利潤を得んがためであつて、使用價値に對する何等かの慾望を充さんがためではない。資本家にとつては、その生產するところのものが、針であらうと機關車であらうと、または靴墨であらうと香水であらうと、何等の差異もないのである。彼等の唯一の問題は、自ら所有する貨幣をもつて、でき得る限り多額の利潤を得ることである。ところで、一方の生產部門では、五割の利潤が得られ、他方の生產部門では一割七分しか得られないといふ場合には、結局、彼等は後者を避け、全力を盡してその資本を前者に振り向けるであらう。そこで、Aは激烈なる競爭の的となり、この部門における生產は急激に增大するであらう。

これに反して、Cの商品生産は減退することになる。かくてわれわれは、競爭の舞臺に、卽ち自由供給の領域に入るのである。

價格は價値によつて決定されるとはいへ、兩者が全く異つたものであることは、すでにわれわれの見たところである。商品の價格を價値よりも大ならしめ、或は小ならしめる原因の最も主要なものは、購買者の需要と販賣者の供給との關係の變動である。

自由競爭の上に立つ現代の生産方法は、需要供給によつて統制されてゐる。それは計畫的に統制される指導者なり、所有者なりの見込みで、自己の利益のために生産を營む私的の各企業によつて經營されてゐるのである。それ故に、若し需要供給の統制がないならば、この生産方法は甚だしい無政府狀態に陷らざるを得ない。需要供給は現存の勞働力を各種の生産部門に配分させ、何れの部門においても、社會が要求するだけの生産物を生産せしめる。とは

言へ、これは極めて一般的な事實であつて、特殊の場合を採つてみれば、決してさうなつてゐない。むしろ、今日の如き無計畫的の生産方法のもとにおいては、或る商品の生産が過多であつたり、過少であつたりするのが常であつて、その後にはじめて需要供給の作用により、價格の低減または昂騰によつて、社會の要求通りに生産を縮少したり擴張したりすることになつてゆくのである。一定の價格標準のもとにおいて、社會の購買力以上に商品が生産されるとすれば、價格は下落し、從つてその商品も購買しうる、または購買することを欲する人々の數は增大することになる。だが、價格の下落と共に利潤もまた低減する。そこで、若し利潤が平均以下に低減するとすれば、資本はその生産部門を退いて、生産が縮少されることゝなる。それと共に價格は再び昂騰して、結局平均利潤に適應した水準に到達する。

これと反對に、商品の生産が、購買者の需要に相當した程度以下に下つて、

價格が右の水準點以上に昇るとすれば、その場合には利潤もまた增進する。すると、生產は、この生產部門に競つて流れこむ。かくて生產が擴大される結果、價格は再び平均利潤の水準に下落する。物價は絕えずこの水準を上下してゐるのである。そして資本の平均利潤率が成立するのである。

9、必要勞働と剩餘勞働　既に說明した、必要勞働時間と剩餘勞働時間とを合せて勞働日を名づける。與へられたる事情のもとにおいては、――勞働生產力の程度や勞働階級の慾望やが一定してゐるとすれば、必要勞働時間は一定の大いさを有してゐる。前には、これを六時間と假定した。如何なる生產方法のもとにおいても、勞働日は必要勞働時間よりも小であることを得ないが、資本家的生產方法のもとにおいては、それは必要勞働時間より大でなければならぬ。剩餘勞働時間が長ければ長いほど、剩餘價値率もまた增大する。それ故に、資本家は勞働日を出來うる限り延長しようとするのである。しかし、勞働者に休息や睡眠や食事の時間を與へなければ、勞働者は遂に萎縮してしまう。だから、資本家もそれを與へないわけにゆかぬ。そこで、それらの時間を能ふ限り切詰めようと努力するのである。

一方、勞働者の立場から言へば、勞働力は勞働者と不可分的に結合されてゐるのであるから、出來うる限り勞働時間を短縮しようとする。生產行程が持續してゐる間は、勞働者は資本の一部にすぎない。資本家的生產方法のもとにおいては、勞働者は勞働を止める時に初めて人間となるのである。

だが、勞働時間の短縮については、かゝる道德的原因の外に、物質的の原因がある。資本は商品交換の法則によつて、當然自己に屬すべきものよりも、より多く得ようと努める。資本家が一日の勞働時間を價値通りに買ふならば、資本家に當然屬するものは、一日分の勞働力の使用價値のみであつて、彼は勞働者の勞働力の回復を妨げざる時間だけ、これを利用し得るにすぎな

い。一つの例を擧げよう。われわれが一本の林檎の木に成つた果實を買つた場合、より多くの利益を得ようとして、その林檎の實を悉く落した上に、なほ薪にする目的で、林檎の木の枝を切つてしまつたとしたら、それは契約違犯になるであらう。何故なら、その木は最早、次の年に從來ほどの實を結び得なくなるからである。

資本家が勞働者を、必要勞働時間以上に働かせることは結局、これと同樣であつて、それは勞働者の勞働能力と壽命とを犧牲にすることである。假りに、かかる過度勞働のため、勞働者の勞働能力の持續期間が、四十年から二十年に縮つたとすれば、とりもなほさず、資本家は、毎日平均二日分の勞働使用價値を利用したことになる。卽ち、一日分の勞働力の代價を支拂つて、二日分の勞働力を收得したことになる。

そこで、標準勞働時間の問題が起るのである。かくて、われわれは、資本家階級と勞働者階級との間に利害の對立を見た。その結果は、兩者の鬪爭となつて現はれる。この鬪爭は、すでに數世紀以前から始まつてゐるのであるが、それは極めて重要な歷史的意義を有してゐるのである。

10、相對的剩餘價値と絕對的剩餘價値　剩餘價値の產出される過程は、以上において說明されたと思ふ。しかし、この剩餘價値をさらに相對的剩餘價値と絕對的剩餘價値とに分類することができる。以下それを說明しよう。

必要勞働時間が一定の大ささを有してゐるとすれば、剩餘價値の率は、勞働時間の延長によつてのみ增大され得る。例へば、一日の必要勞働時間が六時間で、且つそれが不變であると假定すれば、剩餘價値率は、勞働日を延長することによつてのみ增進される。けれども、勞働日なるものは無限に延長しうるものではない。資本家が勞働日を延長しようとする努力は、まづ勞働者の衰弱といふ點で、自然的制限を受ける。次に勞働者が人間として自由な

る活動を要求するといふ事實の中に、その道德的制限があり、最後に種々なる事情の必要上、國家によつて勞働日の制限が規定せられるといふ事實の中に、その政治的制限を見出すのである。假りに、勞働時間がこれ以上、最早延長することができない限界に達したとする。そしてこの限界が十二時間であり、必要勞働時間が六時間であつて、剩餘價値率は十割であるとするならば、この剩餘價値率は如何にして增大されるか。到つて單純である。卽ち六時間といふ必要勞働時間を四時間に緊縮するのである。さうすれば、剩餘勞働時間はおのづから八時間に延長される。勞働日は從前通り十二時間であるが、その組成部分たる必要勞働時間と剩餘勞働時間との比率が異つてくるのである。このことはとりもなほさず、剩餘價値率の變化である。しかも、その比率は培加して十割から二十割になるのである。この剩餘價値率增大の過程は、勞働日とその各部分との大いさを、長さの一定した線に例へてみれば容易に理解される。つまり、剩餘價値は、勞働日の絕對的延長によつて得られるばかりでなく、また必要勞働時間の短縮によつても得られるのである。マルクスは、この前者を絕對的剩餘價値と名づけ、後者を相對的剩餘價値と名づけた。(註)

しかして、相對的剩餘價値の增大は、賃銀の引下げとなつて現はれる。勞働力の價値は與へられた事情のもとにおいては、一定の大いさを有してゐるのであるから、必要勞働時間の短縮によつて剩餘價値を增大しようとする資本家の努力は、結局、勞働力の價格を價値以下に引下げようとすることに歸するのである。

しからば、この勞働力の價値の引下げは如何にして行はれるか。

與へられた事情のもとにおいて、勞働者は一定の慾望を有つてゐる。彼は自己並びに家族の生存維持のために、一定量の使用價値を必要とする。この

(註)「資本論」第一卷第五編第十四章を見よ

使用價値は、商品に外ならないから、その價値は、その生産に必要なる社會的勞働時間によつて決定される。ところで、假りに、この使用價値卽ち商品の生産上、社會的に必要な勞働時間が低減するとすれば、生産物たる、この使用對象の價値もまた低減することになり、從つて勞働者の勞働力の價値も低減し、かゝる價値の再生産に必要なる勞働日部分も減縮される。しかも勞働者の通常の慾望はこれによつて制限されるものではない。これを換言すれば、勞働の生産力の增進は、一定事情のもとにおいて、勞働力の價値を低減せしめる。卽ち勞働生産力が增進して、勞働者の通常の生活必需品の生産に必要なる勞働時間が短縮される場合にのみ、このことは可能なのである。實際について、これを見よう。勞働者が跣足で歩かないで、靴をはくのが習慣であるとすれば、この一足の靴を作るに必要な勞働時間が十二時間から六時間に減じた場合、勞働力の價値もまた低減するのである。だが、ダイヤモンド磨きやレース製造工の生産力が二倍に增加しても、勞働力の價値には影響がないのである。

しかるに勞働生産力の增進は、生産方法の變化、換言すれば勞働要具、または勞働方法の改良によつてのみ可能である。だから、相對的剩餘價値の産出は、勞働方法の改良を條件とするものである。

生産方法の改良と完成とは、資本主義的生産制度にとつては附きものである。もちろん、個々の資本家は、彼が安價に生産をすればする程、勞働力の價値が低減し、從つて他の事情に變化がない限り、剩餘價値は益々增大するといふ事實を必ずしも意識してゐるものではない。しかし彼は、競爭の必要上、絶えず生産行程を改善しなければならなくなる。改善した新たな生産方法が一部の資本家に限られてゐる間は、例外的な利得が得られるわけであるが、それが各方面に普及すれば、かゝる例外的の利得は得られなくなる。け

れども、この生産方法が生活必需品の生産に影響する程度に從つて、勞働力の價値は、或は多く、或は少く低減し、相對的剩餘價値もそれに應じて增大するのである。これが資本家をして、不斷に生産方法を變革せしめる原因の一つである。

勞働生産力が增進すれば、相對的剩餘價値もまた增進するのであるが、商品の價値はそれに應じて低減するのである。こゝにわれ〳〵は、一見矛盾の如く思はれる現象を見る。卽ち、資本家は、より多くの價値を懷に入れるため、ます〳〵安價に生産してより少い價値を商品に附與しようと常に努力してゐるのである。また、資本制生産方法の支配下においては、勞働の生産力が增進すればするほど、勞働者の剩餘勞働時間もまた增大して、剩餘價値の生産がより大となるのである。だから、資本家的生産方法は、勞働の生産力をできるだけ增進して、必要勞働時間を最低限まで短縮すると同時に、また勞働日をできうる限り延長しようとするのである。

11、生産力增大の歷史的段階　ところで、勞働生産力の增大は、如何にして實現されるか。マルクスはこれを三つの根本的歷史的段階に從つて叙述してゐる。卽ち、一、單純なる協業。二、勞働の分業とマニフアクチユア。三、機械及び大工業である。

（イ）**協業**　資本家は、單に賃銀勞働者を使用するといふだけでは資本家たるに充分でない。被傭勞働者の作りだす勞働價値量が、彼のために彼自ら直接勞働に手を下すことを餘儀なくされずして「身分相應」の收入を確保し、その富を增大せしめる程度に達した時、初めて資本家と言ひ得るのである。このためには、ギルド的手工業におけるよりも遙かに多くの勞働者を、同時に使用することが必要である。そして、これこそが歷史的にも論理的にも、資本制生産方法の出發點をなすのである。

資本家的生産方法と手工業的生産方法との差異は、最初は單に程度の差にすぎず、種類の相違ではないのである。三臺の織機に對して三十人の織工を使用するか、三十臺の織機に對して三十人の織工を同一の場所で、同時に使用するかといふことは、最初は單に、後者が前者に比して十倍の價値及び剰餘價値を作りだすといふにすぎない如く見える。

しかし、より多人數の勞働者を使用することは、これ以外の差異をも伴ふものである。個人の數が少なければ少いほど、個人的特徴が顯著に現はれるが、人數が多ければ多いほど、それは減少する。三十人を使用する場合よりも三人を使用する場合に、各勞働者の個人的差異はより著しく現はれる。三十人の場合には、優秀なる勞働者のより大なる勞働と、劣惡なる勞働者のより小なる勞働は相殺されて、平均勞働が供給される。

同時に、同じ場所で多數の勞働者を使用するといふことは、さらに他の利益をも伴ふ。まづ勞働場の增築について、三十人の場合には三人の場合の十倍の費用を要するわけではない。また一萬斤の棉花を容れる倉庫は、一千斤を容れる倉庫に十倍する費用を要するものではない。從つて生産物に再現するところの不變資本の價値は、他の條件に變化なき限り、勞働者の數が多ければ多いほど使用勞働者との比例において減少するわけである。從つて、前貸總資本に對する剰餘價値の比率が增大し、同時に生産物の價値並びに勞働力の價値も低減することになる。この場合には、剰餘價値は可變資本の割合に增大するわけである。

多數の勞働者を、同時に同じ場所で、一定の結果を得るために使用することは、彼等の計劃的なる協業、卽ち協同勞働に至らしめる。この協業は個々の生産力の總和よりも大きく、且つそれとは別種の新たなる社會的生産力を作りだすものである。この新たなる生産力は、最初から集合的である。それ

は少數の勞働者をもつてしては實行し得ないところの勞働行程を可能ならしめる。例へば、三人の男が一日がゝりでも動かすことのできない石を、三十人の男ならば、またゝく間に、易々と持ち上げることができるのである。これは一例にすぎないが、協業は勞働の生産力を增大するものである。

資本主義のもとにおいては、多數の勞働力が同一の資本家によつて購買された場合にのみ賃銀勞働者は協同的に勞働し得る。そして、この購買される勞働力が多ければ多いほど、益々多額の可變資本が必要になり、使用する賃銀勞働者の數が增せば增すほど、原料や道具の量、即ち不變資本の必要量も大となるわけである。そこで一定の範圍における協業の遂行は、一定量の資本を前提とする。そして一定量の資本といふことが、資本主義生産方法の前提條件なのである。

（ロ）**分業及びマニフアクチユア**　次に、工場的手工業（マニフアクチユア）を觀察しよう。マニフアクチユアとは未だ機械をもつて經營される近世的大産業には達してゐないが、しかし、最早、中世の産業でもなく、また家内工業でもないところの産業である。資本家的生産方法の一特徴的形態としてのかゝる産業は、大體において十六世紀の半から、十八世紀の終りまで支配してゐたものである。この産業の根柢をなしてゐるものは手工業である。だから工場的手工業の場合においても、單なる手工業の場合と同樣に、勞働の結果は本質上、各勞働者の熟練と確實と迅速とに基いてゐるのである。しかし、手工業の勞働者と工場的手工業勞働者との間には、非常に著しい相違がある。手工業勞働者の作業は複雜多樣であるが、工場的手工業においては、それが非常に單純となり、勞働者は年中、同じやうな作業ばかりをしてゐなければならない。彼は最早、目的を意識した獨立の生産者ではなく、大なる勞働機構の一部分であり、いはゞ總勞働者といふ全身の肢體にすぎない。

かゝる勞働において、勞働者はその極限された領域について言へば、精巧さが著しく增進することは言ふまでもない。彼は種々なる妙技を發見して、それを仲間に傳へ、仲間からまた、さらに他の妙技を敎へられる。

工場的手工業における分業は、かくして勞働者の精巧さを增進せしめるばかりでなく、またそれに用ゆる道具の完成を齎すのである。これらのすべての事情から、工場的手工業の勞働生產力は手工業のそれに比して著しく增進するのである。

（ハ）**機械及び大工業**　工場的手工業における分業は、手工業的勞働を進歩せしめるものではあるが、しかし、これを排除してしまふものではない。手工勞働の熟練は、工場的手工業についても、大體においてその基礎をなしてゐる。しかして、熟練せる勞働者は、これによつて一定の獨立を與へられる。彼は資本家の全經營の持續上、必要缺くべからざるものとなるのである。

そして彼は、その强みを自覺すると同時に、これによつて工場的手工業の手工業的特徵を維持しようと努力するに至る。この努力は、現代においても、工場手工業的に經營されてゐる幾多の產業において見られる事實であつて、勞働組合運動の成功に貢獻するところが少くない。

前述の如く、工場的手工業は複雜なる勞働器具を生產するところの、等級的に組織された作業場を出現せしめた。工場手工業的分業の產物たるこの作業場はまた機械を作りだしたのである。そして機械は、手工業的活動の支配に一擊を與へた。

機械とは何ぞや？　それは如何なる點において手工器具と區別されるか。勞働要具は、如何にして道具から機械に轉化したか。優れた機械の裝置は、適當なる運動に配置されゝば、それによつて、これまで勞働者が同樣の道具をもつてなしたと同一の作業をなすものである。この機械裝置の動力が直接

人間によつて與へられるか、または、それ自身一つの機械によつて與へられるかは問題の本質に何等の影響を及ぼすものではない。機械と道具との區別を、この動力の人間であるか、自然力であるかによつて決定しようとするのは誤謬である。何となれば、かゝる動力の使用は、機械の使用よりも遙かに古く、水車やポンプの動力として、動物や風や水などを利用することは夙くから行はれてゐたが、そのために生産方法の革命を齎したことはないからである。

しかるに、紡績機械といふ最初の重要なる作業機が發明された時、初めて産業革命が起つたのである。蒸氣の力は、二千年前のギリシャ人にもすでに知られてゐたらしく思はれるが、彼等はそれを如何に利用すべきかを知らなかつた。それが一七八五年機械の動力として使用されるに至つて、生産技術上の諸條件を變革したのである。人間は連續的、劃一的なる運動を生ぜしめる器具としては極めて不完全であり、且つあまりに微弱である。しかも、强壯なる馬は高價であるばかりでなく、その使用範圍が極限されており、風は餘りに不安定で制御しがたく、水力もまた、かゝる動力としては充分でなくなつた。

かゝる時、ジエームス・ワットが、いはゆる複作用蒸氣機關なるものを發明するに及んで、初めて、石炭と水とを消費して自己の動力を作り、その力は全く人間の制御のもとにたち、可動的にして且つ他を移動せしめる一機關たり、都市的にして、水車の如く田舍的ならず、また水車の如く生産を所々に分散せしめずして、都市に集中することができ、その工業上の應用において「普遍的なる」發動機が發見されたのである。かゝる完成された動力が、作業機の上に作用して、その發達を促すことは疑ふべくもない。

機械には三つの要素がある。すべての發達したる機械は、三つの本質を異

にする部分から成つてゐる。發動機、配力機及び作業機が卽ちそれである。全機械の動力としての發動機については說明を要しないであらう。配力機は、節動輪、廻轉軸、齒車、滑車、ヴエルトその他各種の連動機より成るものであつて、運動を調節し、必要に應じてその形態を變化せしめ、またそれを配分して作業機に移轉せしめる。作業機は十八世紀における產業革命の出發點となつたものであるが、今日でも在來の手工業的、または工場手工業的經營が、機械經營に推移するところにあつては、やはりその出發點となつてゐる。作業機といふ中には、力織機の如く、舊來の手工器具から轉化したものもあり、また紡績機における紡錘截斷機におけるナイアなどの如く、在來の器具を新たなる機體に据えつけて出來たものもある。けれども同一の作業機によつて、同時に運轉せしめられる道具の數は、最初から一勞働者の手工器具に加へられるところの制限から免がれてゐる。

發動機は配力機構の適當なる案配によつて、多數作業機の全部を同時に運轉せしめうるものであるから、これがため個々の作業機は、機械的生產の單なる要素たる地位に引下げられてしまふのである。例へば、力織機における如く、同一の作業機によつて全製品が作りあげられるところでは、機械經營に基く作業場たる工場內には、その都度、單純なる協業が再現する。なぜなら、多數の同種類の作業機が、同一の場所で、同時に列んで協同するからである。しかも、そこには技術上の統一が存在して、一つの發動機がすべての作業機を均等に運轉し、これらの作業機は畢竟、同一發動機構の機關にすぎないものである。

しかるに、勞働對象は、種々異つた段階の相互に關聯した一列を通過する場合がある。工場的手工業に特有なる分業に基く協業は、この場合種々なる作業機の組合せとなつて再現するのであるが、かゝる現象の行はれるところ

に、初めて獨立した個々の機械に代つて、嚴密の意味における機械組織が出現するのである。卽ち、各部分機械は、その直後に來るものに原料を供給するのであつて、工場的手工業のもとにおける部分勞働者の協業と同樣に、この編成された機械組織においてもまた、各部分機械相互の間斷なき協力が、それ〴〵の數、範圍及び速度の一定の比率を必要とするやうになるのである。

かやうな結合作業機は、その全過程が連續的であればあるほど、卽ち原料が最初の形態から最後の形態に推移する間、中絶すること少なければ少いほど、言ひ換へれば、それが人間の手の代りに機械そのものを通じて、一つの生產階級から他の生產階級へ送り込まれることが多ければ多いほど、益々完全のものとなる。そして、この結合作業機が、人間の助力なしに原料の加工に必要なる一切の運動をなし、たゞ人間の附添ひのみを必要とするに至れば、こゝに機械の自働的組織なるものが生じて來るのである。

しかしながら、機械の存在が、なほ半技術者たる性質を脫しない勞働者の個人的熟練と、個人的能力とに基いてゐた間は、單に機械の價が極めて高價であつたばかりでなく、またその應用の擴大、大工業の發達が、機械製造工の增殖によつて左右されることを免れなかつた。

だが、大工業が一定の發達を遂げるや否や、生產技術の點において、手工業的並びに工場手工業的基礎と衝突するに至つた。例へば、近世における水力壓搾機や、梳維機や、力織機の如き諸機械は、工場的手工業によつては供給し得ざるものである。

また、一つの產業部門における革命は、それと關連した他の諸部門における革命を伴ふものであつて、機械紡績は機械織機を必要とし、さらにこれらのものが合して、晒布、捺染、染色等の方面に、機械的、化學的革命を必要とする。大工業は生產の迅速を特徵とするものであつて、急速に原料を受入

れ、急速に多量の生産物を市場に供給しなくてはならぬ。かくて大工業は、交通運輸機關の革命を呼び起し、帆船の代りに汽船が、馬車の代りに鐵道が飛脚の代りに電信が現はれた。

かくの如く、大工業なるものは、その本質に合致した、それ自身の基礎を作りださなければならない。そして、これは機械を作るところの機械を占有することによつて行はれるのである。かゝる機械の發明によつて、從來の最も熟練した勞働者の如何なる蓄積經驗からも與へられなかつたところの容易さと、正確さと、迅速さとをもつて、個々の機械部分の幾何學的形態を作り出すことができたのである。

工場的手工業のもとにおける分業は、主として主觀的のものであつた。しかるに近世の大工業は、機械組織の中に全く客觀的なる生産組織を有してゐるのであつて、この豫め完成された生産組織が、勞働者と對立し、從つて勞働者の方から、これに自己を適合してゆかねばならなくなつたのである。かくて社會化された勞働者による個別的勞働者の驅逐、卽ち協業が必然的の現象となつた。それは勞働要具の性質によつて命ぜられた技術上の必要となつたのである。

大工業に相應した一般的の生産條件が成立するや否や、この大工業なる經營方法は、驚ろくほど急激の發展を遂げる。製造品のために、原料と購買者とを供給する新市場の開發を目的として、不斷の右往左往が行はれる。市場の擴張が行はれるたびに、熱病的の生産が、それに伴つて、市場は過充する。すると、それに續いて産業不振の時期が到來する。産業の一生涯は、過度の活氣期と好景氣期と過剩生産期と恐慌期と沈衰期との連續である。

この循環は、これを勞働者から見れば、過度勞働と失業との不斷の動搖、總じて生活全體の完全なる不安を意味するものである。しかし、かゝる循環

は、技術上の進歩に基く可變資本の相對的減少と交錯するものである。この兩者は好景氣の時期には、相互に對抗して作用し、技術上の進歩をして、勞働需要の增長に制限を加へしめるが、恐慌期においては、互ひに協力して同一の方向に作用する。この時期には失業と並んで競爭が無制限の狀態に達し、物價低減の要求が兇暴を極める。そしてこの物價低減は、一部的には勞働を省く機械の採用により、一部的には勞働時間の延長によつて、さらにまた一部的には勞銀の低下によつて、行はれるものであるが、何れの場合にも、勞働者の利益を犧牲としてゐるのである。

しかしながら、機械の發達による資本主義の發達は、新しい社會への飛躍の諸條件を孕んでゐる。より高級なる新文化の發芽を助長するところの諸條件を發展せしめる。こゝに大工業制度の革命的方面を發見するのである。

近世的大工業は、從來の如何なる生產方法よりも驚くべき窮乏を作り出した。否、むしろそれは社會のあらゆる階層を攪亂した。一切の傳來的生產事情と、一切の傳來的先入觀念とは破壞され、ついで起るところの新たなる生產事情それ自體の胚種が、おのづから發芽するのである。

次から次へと新たなる發明、新たなる勞働方法が現はれた。資本家と勞働者との大量が、絕えず一つの生產部門から他の生產部門へ、一つの國から他の國へと移動する。かくして一切の固定と、それに對する一切の信仰とが消滅するのである。一例を擧げれば、獨立の農民は、今や歷史的動力の中心たる大都市に集注され、そこにおいて、この種の運動を增進せしめる助けとなり、婦人と兒童とが工場に引きこまれて、市民的家族形態は分解される。この後者は、傳來の家族形態の解體を、賃銀勞働者に餘儀なくせしめてゐるのである。

これに就いてマルクスは言ふ。——『然しながら、資本による未成熟勞働力

の直接または間接の搾取を生ぜしめたものは、親權の亂用ではなく、むしろ反對に、親權をばそれに照應した基礎を排除することによつて一つの亂用たらしめたものこそ、資本制搾取方法なのである。資本制度の內部に行はれる、舊來の家族制度の分解は、如何に恐ろしく厭なものであらうとも、大工業なるものは、それが家庭圈の彼方にある社會的に組織された生產行程の內部において、婦人や、青年男女や、幼兒などに割當てる、極めて重大な役割をもつて、家族的及び男女關係の、より高級な一形態に對する新らしき經濟的基礎を造り出すのである。キリスト教的、チュートン的、家族形態を絕對視することは、古ローマ的、古ギリシャ的、また東洋的家族形態を絕對視すると同じく、迂愚の沙汰であることは言ふまでもない。また、男女及び種々なる年齡の個々人をもつてする結合勞働總員の組成は、勞働者をば、生產行程のために存在せしめて、生產行程をば、勞働者のために存在せしむることなき、原生的に粗暴なる資本主義形態のもとにおいては、腐敗と奴隸狀態との害毒の源泉たるとはいへ、適當なる事情のもとにおかれる時、それは、むしろ人間味ある發達の源泉とならねばならないことも明白な事實である。』(註)

機械は、勞働階級の上に計り知れぬ苦痛を與へたとは言へ、それは、マルクスの言ふ如く、勞働階級に輝かしい希望を約束してゐる。それ故にこそ勞働者は强い自信を以て、機械及び大工業制度と相對することができるのである。『幾百萬のプロレタリアの屍によつて肥された勞働の畑には、新たなる、より高級なる社會形態の種子がより高級なる社會形態が發芽し來るのであつて、機械生產は、新たなる人類のよつて立つべき基礎となるのである。』(註)

(註) マルクス著高畠譯「資本論」第一卷第四篇第十三章

(註) カウキー「資本論解說」第二篇第十章

四、勞　銀

1、勞働力の價値(または價格)の勞銀化

『人が、勞働者に君の賃賃は何れ

だけか？　と尋ねたならば、或る者は「私は私の資本家から一日一フランを得てゐる」と、答へ、他の者は「私は二フランを得てゐる」などゝ答へるだらう。彼等は彼等の屬してゐる勞働部門が異なるに從うて、一定の仕事の完了に對し、例へば一ヤアルの麻布を織ること、または一ボーゲン分の活字を植ゑることに對し、彼等各自の資本家から受領するそれ〴〵の金額を擧げるであらう。その言ひ表はしの異るに拘らず、ともかく勞賃といふものは、一定の勞働時間に向つて、または一定の勞働給付に向つて、資本家の支拂ふ金額だといふ一點においては總て一致するところである。(註)』

商品の價格とは、貨幣に言ひ現はされた、その商品の價値のことである。そこで經濟學者たちは考へる。――勞働に價格がある以上は、價値もなければならない筈である。しからば勞働の價値とは何であるか。それは、他のすべての商品の價値と同じく、その生產に必要なる勞働時間によつて決定される。しからば、十二時間の勞働を生產するに幾何の勞働時間を要するか。十二時間を要することは明かである。今、この前提に從つて、勞働の代價が價値通りに支拂はれるとすれば、勞働者は、彼が生產物に加へたゞけの價値を受取らねばならぬ。すると剩餘價値の學說は、虛僞なるものであるか。または價値說が虛僞であるか。或は、その兩方とも虛僞であるかでなければならぬ。かうなると、資本家的生產の謎は遂に不可解のものであることになる。リカルドにおいて絕頂に達した正統派ブルジョア經濟學は、この矛盾のために難破したのである。

（註）マルクス著河上肇譯「賃勞働と資本」（岩波版）二八―二九頁

マルクスはこの問題を、勞働と勞働力との間に明確なる區別を設けることによつて、見事に解決した。彼は勞働なるものが、あらゆる商品價値の源泉であり、尺度であるとは言へ、それ自體においては何等の商品價値をも有するものではなく、從つて何等の商品でも有り得ないことを論證したのである。

市場に現はれるものは、勞働力を販賣するところの勞働者である。勞働は勞働力といふ商品の消費によつて生ずるものである。それは恰も、シャンペーンなる商品の消費によつて醉ひといふ氣分が作り出されるのと同じである。この場合、資本家はシャンペーンを買ふのであつて、それから生ずる醉ひを買ふのではない。同樣に、資本家は勞働力を買ふのであつて、勞働を買ふのではない。

しかるに、勞働力なるものは一種特別の商品である。それは消費後に初めて代價を支拂はれる。勞働者は勞働をしたのちに、初めて代價を支拂はれるのである。そこで現實的には、勞働力が買はれるのであるが、一見、勞働の代價が支拂はれるかのやうに見える。勞銀は、勞働力の價格として現はれ來るものではない。それは勞銀として、資本家から勞働者の手に支拂はれるまでの間に、一轉化を遂げるのである。それは勞働の價格として、われわれの

面前に現はれて來るのである。そもそも、この轉化は如何にして行はれ、如何なる結果を生ずるであらうか。マルクス以前の經濟學者は、勞働力の價格と勞働の價格との區別を認識しなかつたが故に、この問題を科學的に解明することが出來なかつた。マルクスは、これを嚴密に、科學的に闡明したのである。

2、時間賃銀と請負賃銀　マルクスによれば、勞銀の二つの基本形態は、時間賃銀と請負賃銀とである。まづ、時間賃銀から研究しよう。すでにわれわれの觀た如く、勞働力の日價値なるものは一定事情のもとにおいては一定してゐるものである。今、假りに勞働力の日價値が二圓四〇錢、通例の勞働日が十二時間であるとしよう。しかも、一切の商品の、從つて勞働力の價値と價格ともまた、合致するものと假定する。この場合、十二時間なる勞働の價格は二圓四〇錢に等しく、一時間なる勞働の價格は二〇錢に等しい。かく

して見出される勞働一時間の價格が、卽ち勞働の價格の單位、尺度として役立つものである。つまり、勞働力の日價値をば勞働時間の數で割れば、勞働の價格がわかるわけである。

勞働力の價格と日賃銀、または週賃銀とは、種々なる方向に運動し得る。今、勞働時間が十二時間から十五時間に延長され、勞働の價格が同時に、二十錢から十八錢に低減したと假定せよ。その時、日賃銀は二圓七〇錢となり、勞働の價格は低減したにも拘らず、日賃銀は同時に昂騰したことになる。かくの如く、勞働の價格なるものは、勞働力の日價値と、通例の勞働日に含まれる勞働時間との大小によつて左右されるものである。

ところが、資本家は、例へば恐慌の場合、商品が賣れなくなつたゝめに、勞働時間を短縮して、從來の半分に相當する時間だけしか勞働させないやうにしたとする。この場合、資本家は勞働の價格をそれに準じて引上げるものではない。この時、勞働の價格が二十錢であつたとすれば、そして勞働時間が六時間の場合には、一圓二〇錢しか得られない。だが、彼の勞働力の日價値は、遙かに高く、前の例によれば二圓四〇錢である。

われわれは前に、勞働日の延長が、勞働者に對する苦痛の源泉であることを見たのであるが、今また勞働日の一時的短縮が、同樣に苦痛の源泉であることを知るのである。

勞働時間の持續的延長は、勞働の價格を低減せしめるが、反對に勞働の價格が低廉なる時は、勞働者は僅かばかりの日賃銀をも確保せんがために、餘儀なく勞働時間の延長に屈服せざるを得ない。しかも低廉なる勞働價格と長い勞働時間とは、固定する傾向をもつてゐる。資本家は、利潤を大ならしめんとして賃銀を引下げ、勞働時間を延長する。しかし、資本家相互の競爭はまた、終局において、それに相應した程度で、諸商品の價格を低下せしめる。

かくして、勞働日の延長と賃銀の節減によつて得られた特別の利潤は消滅するのであるが、諸商品の價格は依然として低廉を維持し、過度なる勞働時間の場合にも、低下したまゝの水準に賃銀を止まらしめるところの、强制手段として作用するのである。かくて、勞働者は永續的不利益を蒙るのである。

また、或る種の勞働部門においては、資本家は一定の日賃銀なり、週賃銀なりを支拂ふ代りに、勞働した時間數に應じて賃銀を支拂ふといふ方法が行はれてゐる。この場合、勞働者は終日、資本家の支配のもとにゐなければならない。そして彼を過度に勞働させたり、少時間しか勞働させなかつたりすることは、資本家の隨意である。しかるに、勞働の價格なるものは通例の勞働日の大小に從つて決定されるものであるから、資本家は勞働の『標準價格』を支拂ふことによつて、勞働力の全價値に對して支拂ふことなしに、勞働力の全部に對して支配權を確保することになるのである。このことは、勞働者が標準時間よりも少く働かされる場合には、明かに現はれてくることであるが、標準數よりも長時間働かされる場合にもまた、同樣に當てはまるのである。けだし、各勞働時間に支出される勞働力の價値は、同一なるものではなく、勞働日中の最初の時間に支出される勞働力は、最終の時間に支出されるものに比ぶれば、より容易に恢復され得る。それ故に、最初の時間に支出される勞働力は十時間または十二時間目に支出されるものに比べて、使用價値は遙かに大でありうるが、價値はより小となるのである。これがため、多くの經營において、一定限までの勞働日を標準的となし、それ以上に出る勞働時間を殘外時間となす習慣が生じた。そして、この殘外時間に對しては、より高き賃銀が支拂はれてゐるのであるが、時間拂で勞働者を雇傭する上記の資本家は、この殘外時間につき、より高き支拂ひをせずに濟むことになるのである。

かくの如き標準勞働日と殘外時間との區別は、標準勞働日の內部における勞働の價格が、標準賃銀を代表し、殘外時間については、勞働力の日價値以上に追加賃銀が支拂はれてゐるといふ意味に解せらるべきではない。といふのは、年中殘外勞働を勵行してゐる工場もあり、かゝる工場では、標準賃銀を極めて低くし、勞働者はこの賃銀では生存することができないので、餘儀なく殘外勞働をしなければならぬやうに仕組んであるのである。かく殘外勞働が常則となつてゐるところでは、標準勞働日なるものは、現實的勞働日の一部にすぎず、標準勞働日なるものは、勞働者の生存維持に必要なる賃銀の一部にすぎないのである。しかして、殘外時間について、よりよき賃銀を支拂ふといふことは、勞働者をして勞働日の延長に同意せしめる手段となるにすぎないものであり、勞働日の延長は、前述の如く、勞働價格の低減を伴ふものである。

次に請負賃銀を考察しよう。時間賃銀なるものが勞働力の價格の轉化した形態であるやうに、請負賃銀はまた時間賃銀の轉化した形態である。前の假定に從つて、通例の勞働日が十二時間、勞働力の日價値が二圓四〇錢であるとしよう。そして一人の勞働者が一定の品物を毎日平均二十四個作るものと假定する。しかる時、勞働者は一時間當り二十錢の割合で計算された日賃銀で備はれることも出來るし、また一個十錢の割合で出來高に應じて賃銀の支拂を受けることも出來る。この後の場合における賃銀が、卽ち請負賃銀である。請負賃銀においても、時間賃銀におけると同樣、勞働力の日價値と勞働日の通例の大小とが基礎をなすのである。しかも一見請負賃銀は、生產者の熟練の程度によつて決定される如く見える。しかし、これは外觀であつて、勞働の生產力が增進するや否や、それに應じて請負賃銀が引下げられるといふ事實を見れば消滅するところのものである。例へば機械が改良された結果、

一人の勞働者が一個の物品を作るのに、最早平均半時間を要せず、十五分で作るやうになつたとすれば、他の事情に變化なき限り、資本家は最早、一個當り十錢を支拂はないで、それ以下に低下せしめるのであらう。

しかるに、もしその勞働者――個々或は一組の――が僥倖にも非常に多量の生産物を作り出すことがあれば、かゝる特殊の場合をも考慮に入れて、契約された請負賃銀は、賃銀總額が通例の賃銀水準を餘りに超過するといふ口實を以て、切り縮められるのである。これをもつて見ても、請負賃銀なるものが、時間賃銀の轉化した形態に過ぎないことが明瞭である。

要するに請負賃銀は、資本家のために大なる利益を齎すものである。時間賃銀においては、資本家は供給された勞働量といふ方面から勞働の代價を支拂ふのであるが、請負賃銀なる形態をもつてする時は、生産物の方面から勞働力の代價を支拂ふわけである。であるから、請負賃銀においては、勞働者は自己の利益上、各時間に出來得る限り多量の生産物を供給するといふ結果を期待し得る。しかもそれは外部からの刺戟によらずして行はれるのである。のみならず、彼が果して品質の平均せる生産物を作つたかどうかを、時間賃銀の場合よりも遙かに容易に確かめることが出來る。そして生産物に僅かの疵でも發見すれば、それによつて賃銀を削減することが出來るのである。從つて請負賃銀の場合には、資本家及びその代理者は、勞働者に對する監視が不要となり、勞力と費用とを節減することが出來る。

請負賃銀制度のもとにおいては、勞働者は自己の利益の立場から、出來得る限りその賃銀を大ならしめようとして、出來得る限り能率的に長時間勞働するやうになる。彼等は過度の勞働が單に自己の身體を破壞するのみでなく、また勞働の價格をも低減せしめるものであることを顧みる餘裕がない。何故なら、彼等もまた勞働者相互間の競爭の必然律から脫することは出來ないか

らである。勞働者相互の、かゝる競爭と、請負勞働による自由獨立の外觀と、勞働者相互の孤立とは、彼等の團結組織と一致的行動とを極めて困難ならしめるものである。さらにまた、請負賃銀制が、勞働に與へる不利益は、勞働者と資本家との間に介在する寄生者を生ぜしめる。例へば、勞働者と資本家との間に立つて、資本家が勞働者に支拂ふ賃銀の中から少なからぬ部分を取り去ることによつて生活するところのいはゆるブローカーの如きものの存在を可能ならしめる。また勞働者が組になつて働かされるところでは、資本家は一定の單價で生產物を買ふといふ契約を、各組の組頭との間に締結し、部下の勞働者に對する支拂は、彼等組頭の自由裁量に任せるといふ形式を採る。この場合、『資本による勞働者の搾取は、勞働者による勞働者の搾取を通して實現される』のである。

要するに、請負賃銀は勞働者から見れば不利であるが、資本家から見れば利益である。

3、**絕對的賃銀と相對的賃銀**　勞働の價値及び價格と、それの剩餘價値に對する比例とについて、生ずる各種の場合が、勞働日の大小、並びに勞働の能率及び生產力の變化によつて左右されることは、すでに說いた。ところが、この運動と同時に、今一つそれと交錯する運動が、勞働力の價格の實現される生活資料の分量の上に行はれる。そして、これらすべての變化はまた、勞働力價格の轉化した形態である賃銀の上に生ずる變化の條件となるものである。かくて、一國の賃銀は不斷に運動し、時に應じて種々異なるものである。この時間的差異は、また空間的の差異をも伴つて、アメリカの賃銀は日本のそれよりも高く、日本の賃銀は支那のそれよりも高いといふが如き現象を齎すのである。

これについてマルクスは、次の如く言つてゐる。——

『國民的勞銀を比較するに當つては、勞働力の價値の大小における變化を決定する一切の要因――自然的並びに歴史的に發達した、第一次生活必需品の價格及び範圍や、勞働者の教育費や、婦人及び幼年勞働の演ずる役割や、勞働の生産力や、勞働の時間的並びに能率的大小などを考慮することが必要になつてくる。極めて皮相的な比較においてさへも、まづ異つた國々の同一産業に對する平均的の日賃銀をば、同じ大いさの勞働日に約元しなければならぬ。そして、諸種の日賃銀を各平均化したのち、さらに時間賃銀をば請負賃銀に換算することが必要である。けだし請負賃銀のみが、勞働の生産力並びに能率程度の分度器となるからである。』(註)

一國民における勞働の絶對的價格は、比較的高いが、相對的の勞銀、換言すれば、剰餘價値または總生産物の價値と比較した勞働價格並びに實質賃銀、換言すれば、賃銀をもつて購買し得る生活資料の量は、極めて低い場合があり得るのである。

(註)「資本論」第一卷第六篇第二十章

五、資本の蓄積行程

1、資本收入と資本蓄積　貨幣の資本への轉化については、既に述べた。しかして、資本主義的生産方法の意義が、剰餘價値の生産にあるといふこともまた、すでに我々の觀たところである。

ところで、勞働者によつて生産される剰餘價値は、如何に消費されるか？資本家は、勞働者より高級な生活慾望をもつてゐて、勞働者が彼のために生産する剰餘價値の一部は、彼等の贅澤三昧に浪費されることは言ふまでもない。そして、資本家が遊冶郎として、或はまた社交家として、その取りまき連中と共に亂費する部分を、われわれは『資本の收入』(註)とよぶ。しかし、かくの如く資本家によつて、個人的に消費される剰餘價値は、剰餘價値の全體

(註)　收入といふ言葉は經濟學に

の中の一部分にすぎない。殘りの部分は、生産的に消費される。即ち、より大きな規模において生産を開始するために、この剰餘價値をもつて、新しい生産手段や、原料や、機械を買入れるのである。かく、生産的に消費される剰餘價値の部分、即ち言葉を換へて言へば、生産過程を擴張するために使用される部分を、われわれは『資本の蓄積』といふのである。この資本蓄積の過程において、剰餘價値から再び資本が生れる。だから資本家にとつては、資本の蓄積は止むにやまれぬ必要である。

そこで資本の蓄積行程を觀察しよう。

剰餘價値が生産行程の上に影響し得るのは、再生産、即ち生産行程の反覆が行はれる場合にのみ限られてゐる。ところで、すべての社會的生産行程は生産行程であると同時にまた、再生産行程であつて、如何なる社會形態のもとにおいても、生産は間斷なく進行するか、或は一定の時期を隔てゝ反覆されるものである。といふのは、如何なる社會形態の下においても、消費資料の生産の外に、さらに生産機關をも絶えず生産することが必要だからである。

資本家的生産形態のもとにおいては、再生産もまた、同樣の形態を採ることはいふまでもない。一たび剰餘價値を生んだ資本は、さらに二回、三回と引續きそれを生むために使用されなければならぬ。かくて資本は、絶えず新たに剰餘價値を産出する。即ち剰餘價値は再生産されるのである。それ故に剰餘價値なるものは、資本の運動の過程において、絶えず、新たに生産されるところの果實である。

2、單純なる再生産　單純なる再生産とは、生産行程が同一の規模で反覆されることに外ならぬ。しかも、この反覆は、生産行程に一列の新たなる特徴を附與するものである。例へば、今、假りに何等かの方法で貨幣を得た貨幣所有者が、それを資本に轉化するとしよう。彼は一萬圓の貨幣を所有して

おいては二つの意味に用ひられる。一は生産から得られる剰餘價値を意味し、今一つは剰餘價値のうち、資本家が個人的に消費する部分を意味する。こゝでは後者を指してゐる。

ゐて、その中、九千圓を不變資本に、一千圓を可變資本、卽ち勞銀として支出するものとする。そして彼はこの資本の投下によつて一萬一千圓の價値ある生產物を作り、それを價値通りに販賣して、剩餘價値である一千圓を消費するとすれば、再生產は前と同じ規模をもつて進行するわけである。卽ち、九千圓が不變資本、一千圓が可變資本として支出されるのである。ところが、こゝに從前と異つた一點が見出される。といふのは、從前の生產行程においては、勞銀に支出された一千圓は、この企業に使用された勞働者の勞働から生れたものでなく、他の源泉から出てゐるのである。それは恐らく資本家自身の勞働によつて得られたものであるかも知れない。ところが、生產行程が反覆される場合、勞銀に支出される一千圓は、前の生產行程の中で勞働者によつて作られた價値に他ならぬ。勞働者は、この生產行程の進行中、單に九千圓の不變資本の價値を生產物に對象化するのみでなく、さらに二千圓といふ新價値をも作り出した。その中、一千圓は彼の勞働力の價値に等しく、殘りの一千圓は剩餘價値に當るのである。

そこで、資本家的生產行程を、一回きりのものとして觀察するならば、勞銀は資本家の懷から前拂ひされたことになる。しかるに、資本家的生產行程を再生產行程として見れば、勞働者は自己の勞働の生產物の一部をもつて勞銀を支拂はれることになる。だから、勞働者が賃銀を受取るのは、自己の勞働生產物の分前を受取ることに外ならない。たゞ勞働者が賃銀の形で受取る分前は、從前の生產行程において作られた、販賣濟みの生產物中から受取るといふ點が異なるだけである。

今、假りに各生產期間が半ケ年であるとしよう。資本家は年々二千圓の剩餘價値を收得して消費するのであるから、五年後には原資本と等額の一萬圓を消費することになる。しかも彼は、依然として一萬圓の資本を所有してゐ

るのである。この新たなる資本は、大小の點においては原資本に等しいのであるが、その根柢は全く異つてゐるのである。本來の一萬圓は彼の使用する勞働者の勞働からではなく、それ以外の源泉から出てゐる。けれども、彼はその一萬圓を五年の間に消費してしまつたのである。この消費した一萬圓の外にさらに一萬圓を有してゐるとすれば、それは正に剩餘價値から生じたものでなければならない。かくて、一切の資本は、それが如何なる源泉から出たものであらうとも、一定期間ののちには、單純なる再生産の作用によつて、資本化した剩餘價値に外ならない。換言すれば、他人の過剩勞働の成果であり、蓄積された資本と化してゐるのである。

資本家的生産行程の前提條件は、勞働者が生産機關から分離されて、一方には無産勞働者（プロレタリアート）が蓄積され、他方には生産機關と生活資料とが蓄積されるといふ事實である。資本制再生産行程のもとにおいては、この出發點が生産行程の結果として現はれる。即ち、資本制再生産行程は、それ自身の條件たる資本と賃銀勞働者階級とを、絶えず生産し保存するものである。

このことを言ひ換へるならば、賃銀勞働者によつて作り出される生活資料及び生産機關は、彼自身の所有に屬するものではなく、資本家に屬するものである。賃銀勞働者は、生産行程に入つた時と同じ姿で、即ち、無産勞働者として、その中から再び出てくるのである。これに反して、資本家は、各生産期間の終期ごとに勞働力を再び購買すべき生活資料と生産機關とを絶えず新たに所有するのである。

資本の再生産行程は、さらに勞働者階級の再生産をも必要とする。われわれが、生産行程をば一回きりのものとして個別的に研究してゐる間は、單に個々の資本家と個々の勞働者とが問題であつた。が、資本制生産方法を連續した形において、即ち再生産行程として觀察する時、われわれの問題となる

のは、個々の資本家、個々の勞働者ではなく、階級としてのブルジョアジーとプロレタリアートとである。前に述べた如く、資本の再生産行程は、勞働者階級の永久化を前提としてゐる。換言すれば、生産行程を絶えず繰り返すためには、勞働者をして不斷に勞働力を恢復せしめ、且つ新たな勞働者を續出せしめなければならぬ。しかも資本家は、このことを勞働者の自己保存本能及び生殖衝動に一任しておくことが出來るのである。

勞働者は自己の得た賃銀によつて、生活資料を購買し、その消費によつて絶えず新たに彼の勞働力を維持してゐる。このことは、たゞ彼自身のためになされてゐるやうに見える。けれども現實には、それが資本家階級のためであり、また資本制生産方法を維持することに役立つてゐるのである。なぜならば、それは賃銀勞働者階級を保存することを意味し、資本制生産方法の前提條件を作り出してゐることであるからである。

かくの如く再生産行程として見る時、勞働者は、單に勞働時間の進行中のみならず、『自由なる』時間――休息、飲食の時間――においても、資本の利益のために活動してゐることになる。要するに、勞働者は再生産行程の立場から見れば、最早、個々の場合に購買された勞働力ではなく、勞働者全體が資本の附屬物として現はれるものである。かくて現代の勞働者は、目に見えない鎖で、資本にしばられてゐるのである。

3、剩餘價値の資本化　この章の初めに述べた如く、資本家は剩餘價値の少くとも一部分を、資本に再轉化するものである。それは如何にして行はれるか？　こゝではその過程を考察しよう。そのためには前節の例を想起する必要がある。一萬圓なる資本は、その投資者に、二千圓なる年剩餘價値を與へる。もし、彼がこの二千圓を消費しないで、原資本に追加するとすれば、彼は一萬二千圓の資本を有することになる。この資本もまた、同じ條件のもとにお

いては、二千四百圓の年剰餘價値を生むのであつて、若しこの二千四百圓を更に資本に追加するとすれば、資本は四千四百圓となり、二千八百八十圓といふ年剰餘價値を生ずることになる。同一の行程が、さらに翌年にも反覆されるとすれば、資本は一萬七千二百八十圓となり、その年剰餘價値は三千四百五十六圓であつて、合計二萬七百三十六圓となる。かくて四年後には、資本は剰餘價値蓄積の結果として、本來の額の二倍以上に達するわけである。

ところで、剰餘價値の全體が蓄積されるか、または單に一部のみが蓄積されるか、といふことは、まだ問題とならない。また剰餘價値が舊來の資本に追加されるか、それとも新たなる資本を形成するかといふことも、今は觸れる必要がない。それが如何ように使用されるにしても、資本に轉化される剰餘價値は、常に剰餘價値を生む價値であるところの、資本に再轉化される。

しかしながら、剰餘價値なるものは、それが資本となるためには商品から貨幣への轉化を遂げたのち、さらに貨幣から適當なる商品への轉化を遂げなければならぬ。例へば、こゝに一人の綿糸紡績業者がある。彼はその綿糸を販賣して、最初に前貸した資本の外に、なほ貨幣の形をとつた剰餘價値を所有してゐるとする。この剰餘價値もまた原資本と合して新たなる資本に轉化されねばならぬ。これは彼の生産機關として役立つ商品が、右の資本增大に相當した量だけ市場に見出される場合にのみ可能である。剰餘價値を追加資本たらしめるためには、追加的の原料――この場合棉花――と、追加的の勞働要具と、增大した勞働力の維持に必要なる追加された生活資料と、最後に、追加される勞働力とが存在してゐなければならぬ。約言すれば、資本の蓄積が可能であるためには、豫め生産擴張の物質的前提條件が與へられてゐることを必要とするのである。しかも綿糸紡績業者は、これらの必要なる追加生産機關が、商品市場に見出されることを期待することが出來る。何となれば、

獨り綿紡業者のみならず、棉花栽培業や、機械製造業や、炭鑛などにおいても、同時に剩餘價値が生産され、從つて剩餘生産物が作り出されるからである。

そこで、個々の資本家の手に歸する剩餘價値ではなく、資本家階級全體によつて占有される剩餘價値の年産額を念頭に置くとすれば、次の如き原則が成立する。卽ち、剩餘價値なるものは、その全部にしろ、一部にしろ、剩餘生産物が生産機關並びに勞働者によつて消費さるべき生活資料より成るのでなければ、資本に轉化されるものではない。

ところで、追加さるべき勞働者は、どこから得られるか、これについては、資本家は少しも氣をもむ必要はない。何故なら、それは勞働者階級自身によつて作り出されるからである。

單純なる再生産のもとにおいても、資本は何年かの後には、單なる剩餘價値のみから成る蓄積資本となる。が、この種の資本は、少くともその發生當時においては、所有者の勞働の成果であり得た。しかるに、最初から蓄積剩餘價値によつて成立した資本は、全くその所有者以外の他人の勞働の成果である。だから、剩餘價値の蓄積とは、不拂勞働の占有を擴大するために、さらにそれを占有することを意味してゐるのである。

これは商品交換の原則に對する甚だしい矛盾である。何故なら、商品交換なるものは、本來、一方においては商品の生産者が、その生産物を所有してゐることを前提とし、他方においてはそれと同等なる價値の交換を前提とするものであつて、何人も自己の勞働によるか、或は同等なる價値の提供によるの外、一定の價値を所有することはできないものだからである。しかるに、資本制生産方法の基礎として、一方においては、生産物を作り出す人と所有する人とが、別人であるといふ事實が生じ、他方において、同等なる價値を

提供することなしに、一定の價値を占有するといふ事實が生じてゐるのである。今や、剩餘價値は資本家的生産行程の結果であるばかりでなく、また、その根源となつてゐるのである。卽ち、資本から剩餘價値が生ずるのみでなく、さらに剩餘價値から資本が生じてくるのである。かくて、一切の富の大部分は、結局、等價を與へずして占有された價値から成つてゐるのである。しかも商品生産の基礎のかゝる顚倒は、商品生産の法則に逆つて行はれるものでは決してなく、むしろ、それに基いて行はれるのである。

商品生産は、一定の發達段階に達した時、必然的に資本制商品生産となるものである。といふよりも、寧ろ資本制生産方法の基礎の上に立つてのみ、商品は生産物の普遍通有的なる形態となるものであるが、それと同樣に、商品生産の所有法則は、必然、資本家的占有の法則に轉化して行くのである。資本化される剩餘價値、言ひ換へれば、蓄積される剩餘價値の部分については、剩餘價値の總額と資本家の伸縮自在な生活標準との外には、何等の制限もない。蓄積は資本制生産方法にとつて必要缺くべからざるものであり、しかもそれは多い程いゝのである。資本家は、如何に多くを所有し、その收入が彼の享樂能力よりも遙かに以上の程度に增大しても、なほ飽きたらず、新たなる剩餘價値の收得を急ぐのであるが、それは彼自身の享樂のためではなく、資本の增大のためである。

六、恐慌と産業豫備軍

1、勞働者階級の增殖　次に資本の增殖と、勞働者階級の增殖との間における相互關係を研究しよう。かのマルサスといふ經濟學者は、勞働者がその利用し得べき生活資料（卽ち可變資本）の量よりも、より急速に增殖し、從つて資本家によつて雇傭され得るよりも、より多數の勞働者が資本家のもとに

職を求めることになる。そこで勞働者の增殖を制限しない限り、失業と飢餓と、それから生ずる一切の罪惡と悲慘とは免れがたいと說いた。

これに對して、マルクスは言ふ。『資本の組成は二重の意義に解すべきである。價値の方面から觀察すれば、それは資本が不變資本、卽ち生產機關の價値と、可變資本、卽ち勞働力の價値とに分割される比例によつて定まる。生產行程の內部に作用する素材の方面から觀察すれば、すべての資本は生產機關と、生きた勞働力とに分割される。この組成は、一方における使用生產機關と、他方におけるその充用に必要な勞働量との間の比例によつて決定される。私は前者を資本の價値組成と名づけ、後者を技術的組成と名づける。この双方の間には、密接な交互關係が存在してゐる。私はこれを言ひ現はすために、資本の技術的組成によつて決定され、その諸變化を反映するといふ方面から觀た資本の價値組成をば、資本の有機的組成と名づける。私が簡單に資本の組成といふ時には、何時もこの有機的組成を指してゐるのである。』(註)

右の如く規定された資本の組成に變化なくして、蓄積の行はれる場合を考へて見よう。

今假りに、その資本が十萬圓であるとし、その四分の三は不變資本、四分の一は可變資本であるとする。そして剩餘價値の中から二萬圓だけを原資本に追加するとすれば、この追加資本もまた原資本と同一の比例で分割され、今や總資本は九萬圓の不變資本と三萬圓の可變資本とから成ることになる。可變資本は不變資本と同一の比例をもつて增大してゐる。卽ち、何れも二割づつ增大したのである。ところで、この新たな追加資本の價値を增殖せしむるには、追加さるべき勞働力が必要である。この例で言へは、蓄積せらるべき二萬圓といふ剩餘價値は、利用し得べき賃銀勞働者の數が二割方增殖した場合にのみ、資本となり得るのである。

(註)「資本論」第一卷第七篇第二十三章（改造社版第二分册六〇二頁）

さて、資本の組成に變化なき場合、賃銀勞働者が資本ほど急速に增殖しないとすれば、勞働者に對する需要は、供給よりも急速に增大して、賃銀が昂騰することになる。マルサスは勞働者の增殖に制限を加へよと主張する時、この場合を念頭においてゐるのである。彼は資本家對勞働者の關係が、賃銀の昂騰によつて排除されると考へてゐるかのやうである。しかし、資本の蓄積とは要するに資本關係のより大規模なる再生產といふことに外ならないのであつて、それは一方において資本と剩餘價値量との增大を意味し、他方においてプロレタリアの增殖を意味してゐるのである。賃銀なるものは、剩餘價値それ自身を危險ならしむる程度にまで昂騰し得るものではない。資本制生產方法のもとにおいては、勞働力の需要は、自己を增殖せんとする資本の慾望によつて喚び起される。故に、資本は決して、剩餘價値の生產を不可能にするやうな價格で、勞働力を購買することは有り得ない。資本の蓄積によつて勞銀が昂騰するとすれば、その場合、次の如き二重の現象が可能である。その一つは、勞働の價格が昂騰しても、蓄積の進行は、そのために妨害されないといふこと、この場合は剩餘價値の率は低下しても、その量は蓄積の結果、同樣に增大し得るからである。剩增價値率の減少は、決して資本支配の擴大を侵害するものではない。いま一つの場合は、例へば、社會的需要の現象の結果、蓄積が衰へるといふ現象である。この場合には、蓄積は減少することになるが、それと同時にまた、賃銀昂騰の原因も現象するのである。かくて賃銀は資本の價値增殖慾を滿足せしむる程度まで低減せしめることゝなる。これを要するに、資本家的生產方法の機構は、それが一時的に作り出した障碍を、自ら除去するものである。

こゝにわれわれは、支拂勞働と不拂勞働との間の特殊な交互關係を觀るのである。卽ち、勞働者階級によつて供給せられ、資本家階級によつて蓄積さ

れる不拂勞働の分量は、單に支拂勞働の異狀なる追加によつてのみ、資本化しうるにすぎぬほど、充分急速に增大する時は、賃銀が昂騰し、他の事情に變化なき限り、不拂勞働はそれに比例して減少する。しかしながら、この減少が進んで資本を養ふ剩餘勞働が、もはや標準的分量をもつて提供されなくなる限度に來るや否や、一つの反動が生じる。卽ち、收入中の資本化される部分は減少し、蓄積は弛滯して賃銀の昂騰運動は阻止されることになる。かくて勞働價格の昂騰は、資本制度の根本に牴觸しないばかりでなく、さらに擴大した再生產をも確保することを、その限界としてゐるのである。

かくの如く資本蓄積上の動搖は、賃銀を一定の限界內に拘束するものであるが、ブルジョア經濟學者たちにとつては、この動搖は雇傭されることを要求しつゝある賃銀勞働者の量の動搖と考へられるのである。彼等にとつては、資本の蓄積が緩漫になることは、それが勞働者の人口が他の場合におけるよりも急速に增加したことであるかのやうに見え、反對に蓄積が急速にすゝむと、それは勞働者の人口を減少したことであるかのやうに見えるのである。

それにしても、勞働生產力と資本の蓄積とは密接な交互關係に立つてゐることは事實である。資本制生產方法なるものは、不變資本の累進的增大、可變資本の相對的縮小を不斷に齎すものである。しかも、可變資本の相對的縮小は、蓄積とは比較にならぬ急速度をもつて前進するものである。蓄積の進行によつて新たに生ずる資本は、その大いさに比して益々少數の追加勞働者を雇傭するのみであるが、蓄積は同時に舊資本の革命を行ふものである。例へば、一つの機械が磨滅し盡された時、その間に生產技術の進步が行はれたとすれば、從前と等しい機械ではなく、より優良な新機械に變へられる。この新たなる機械の購入によつて、同じ一人の勞働者が、從前よりもより多くの生產物を供給し得るやうになる。卽ち、舊資本は生產力のより大なる新資

本として再生産される。これがために勞働者の解雇は、益々增大するのである。

舊資本のかゝる集中と技術的革命とは、それが急速に進行すればするほど、雇傭勞働者の數は增大するが、これを助長するものは新たなる資本の急速なる蓄積である。だが、資本の蓄積が急速になればなるほど、集中と技術的變革は益々促進されてゆくのである。

マルクスは、多くの産業部門内における勞働者數の相對的減少を示す幾多の證據をイギリスの國勢調査から採用した。それによれば、被傭勞働者の減少と同時に、工場の數も減少して反對に、機械の數は增大してゐることが認められた。これは資本の集中と蓄積を示すものである。しかし勞働者の減少は、商工業、または小經營にのみ限られた現象であつて、大經營においては反對に、著しくその數を增加するものである。とはいへ、全體として見れば、資本の蓄積は、雇傭勞働者の數を減少せしめる傾向を有してゐることは認めなければならぬ。加ふるに、近世の大工業の發達は、婦人勞働者および兒童の使用によつて、成年男子勞働者を、幾多の勞働部門から驅逐するに至つた。かくして過剩勞働者數が直接に增大するばかりでなく、少年少女の經濟的獨立や、共稼ぎやが可能になつたために早婚が助長されて、これがまた勞働者階級の再生産期間を短縮することになつたのである。

さらに、資本家的生産方法が農業に侵入するや否や、勞働者群は急激に增大する。農業においては、生産力の增進が直接に雇傭勞働者數の減少を招來する。かくして、過剩にされた人口の中には、國外に移住するものと、工業地方に流れこんで、資本家に職を求める勞働者群の增大を更に著しくした。

かくの如く、勞働者人口は非常なる急速さを以て增殖するものであるが、その結果は相對的過剩人口となつて現はれる。しかも、この過剩人口と稱せ

られる産業豫備軍の存在は、資本の發達を阻止するものではなく、むしろ、資本の發達に役立つところの前提條件の一つなのである。

2、恐慌　資本家的生産方法が發達すればするほど、資本の伸張および緊縮は益々激烈となる。近世の大工業は、すでに見た如く、特殊の循環運動をなすものである。それは週期的に一循する。それは營業狀態の中位の活氣を以て始まり、ついで急激に活氣を加へ、經濟上の大好況を齎し、生産は突如として大擴張を遂げ、生産の熱病的狀態についで、恐慌が襲來する。これが一八七三年までは、約十年目ごとに、世界大戰前には凡そ七年目ごとに襲來したのである。恐慌時においては、營業は極度の沈衰狀態に陷るのであるが、やがてまた市場は適當に擴大されて、過剩の生産物を吸收する結果、再び活氣が回復され、さらにより大なる規模をもつて同一の運動を開始するのである。

何故にかゝる現象が起るか。われわれは、資本家的生産方法の意義は蓄積にあることを觀た。蓄積は絶えず經營を擴張しようとする。剩餘價値を生産的に使用するためには、建物や機械や原料や生活資料やが必要である。けれども擴張は、何時もその時々の要求を遙かに超過する。そこで資本家は常に新しい販路を求めざるを得ぬ。それは、しばしば、販路を得んとする戰爭にまで訴へられる。しかし、生産能力と慾望との間には不均衡が生ずる。だから生産の發達は何時も現存の消費關係の基礎を追ひ越してしまふ。そこで商品は倉庫に充滿する。けれども商品の所有者は、これを賣らねばならぬ。何故なら、彼は商品のために一定の義務を負擔してゐるからである。だが、倉庫に充滿してゐる商品は賣れない商品なのである。從つて彼は、その商品の支拂ひを實行することが出來ない。そこで彼は、破産を餘儀なくされる。破産が相次いで起り、遂には一國全體の産業に擴がるばかりでなく、他國にま

で延びてゆくと全經濟は根本からぐらついて來る。小企業が崩壞し、大企業もこれに續いて崩壞する。この恐慌現象についてエンゲルスは、極めて適確に叙述してゐる。『事實において初めて一般的恐慌の勃發した一八二五年以來、全産業界と商業界、全文明國民並びに、これに從屬する、多かれ少なかれ野蠻な附屬物の生産と交換とは、ほゞ十年目毎に一度は支離滅烈になる。取引は停止し、市場はあふれ、生産物は賣られないで空しく山の如く横はり、現金は姿を消し、工業は運轉を休止し、餘りに多量の生活資料を生産したゝめに、勞役者大衆は生活資料に窮し、破産につぐに破産をもつてし、競賣につぐに競賣をもつてし、沈滯は數年に亘り、生産力と生産物とは大々的に蕩盡される。そして遂には山なす商品は、多かれ少なかれ、價格を引下げることによつて再び市内に捌けてゆく、かくて生産と交換とは、徐々に再び運轉を開始するのである。』(註)

(註) エンゲルス著「反デューリング論」第三編

恐慌の影響を最も激烈に蒙るものは、勞働者である。彼等はそのために犠牲となつて失業する。資本主義制度に内在する、かゝる恐慌現象のために、多數の勞働者は、ありあまつた富のまつたゞ中で、窮乏のどん底に沒落してゆくのである。財貨に對する要求は恐慌の最中においても、否、恐慌の間にこそいよ〳〵烈しいものである。けれども、大衆は貨幣を有つてゐない。從つて彼等には購買力がないのだ。何故に然るかと言へば、社會的生産の大部分が私人の所有に屬してゐるからであつて、資本家は勞働者によつて生産された富を差押へてゐるのである。しかも、勞働者の生産する價値を勞働者から奪ふといふ事實は、資本主義社會の内部に絶えず恐慌を引き起す原因である。

七、地代論

今やわれわれは、視野を轉じて、マルクスの農業理論に移らう。資本論第三卷の最も主要なる部分は地代論である。こゝにおいて、マルクスは、剩餘價値の地代化を取扱つてゐる。資本家的生產方法が農業をも支配するに至る時、この生產方法はブルジョア社會のあらゆる部面を支配するに至つたことを意味する。しかしながら、農業における資本主義の發達は、甚だ緩漫であり、漸進的である。資本主義國家においては、個々の農業企業家によつて占有されてゐる土地面積の制限性のために、市場へ生產物を運搬する條件が平均的ではなく、土地の豐度に差異か存在する結果、農業生產物の生產價格は、最劣等地の生產費によつて決定される。この價格と、より優良な土地における生產價格との差異によつて、差額地代が生ずる。マルクスは、この差額地代をつぶさに分析し、これが個々の土地の肥沃度の相違、土地に投資された資本の量の相違によつて發生することを示した。

あらゆる生產部門および國民經濟一般における利潤の平均は、完全なる競爭の自由、資本の一生產部門から他の生產部門への流動の完全なる自由を前提とするものである。しかるに土地の私有は、この流動の自由を妨げるところの獨占を作り出す。この獨占のために、資本のより低度の構成、從つて個別的には高度の利潤率を特徵とする農業生產は、利潤率平均化の過程に入り込まない。土地所有者は、獨占者として價格を平均以上に維持する可能性を與へられる。この獨占價格が絕對地代を生むのである。差額地代は、資本主義の存在する限り廢せられない。が、絕對地代は、土地の國有が行はれる場合には、廢止され得るのである。かゝる土地所有權の移動は私有者の獨占權の破滅を意味するのみならず、農業における競爭のより完全なる自由を招來することを意味してゐる。故に、歷史上、急進的ブルジョアは、再三再四、この要求を提出したのである。

農業の資本主義が成立するに至るまでには、歴史的に種々なる地代形態をとつて來た。マルクスはこれを詳細に分析してゐるのである。(註)

1、勞働地代　先づ地代發生の出發點として、最も單純なる地代形態たる勞働地代につい考察しやう。この最も原始的な地代形態たる勞働地代については、次のことが明瞭なる特徴として擧げられる。(一)直接的生産者は、自己の生活資料を生産するために必要な生産手段（鋤、家畜等）および勞働諸條件（土地）の事實上の占有者であり、名目上の土地所有者に對して彼は獨立的に農業を營むといふこと。(二)直接的生産者が、自分自身のためにする勞働と、地主のためにする勞働とは、なほ時間的にも空間的にも分離されており、後者は生産諸條件の所有者のための不拂剰餘勞働であることが明瞭であるといふこと。(三)從つて、この地主のための不拂剰餘勞働は、第三者のためにする、强制勞働といふ粗暴な形態で直接現はれるといふこと。最後に、

（註）「資本論」第三卷第六篇（改造社版第五分册一五五頁以下參照）

この直接的生産者が、如何なる程度まで自己の地位を改善し、自己を富ましめ、自己の不可缺的生活資料以上に、なほ超過部分を生産し得るかといふことは、地代の大小如何にかゝるといふことである。

2、生産物地代　勞働地代の生産物地代への轉化は、經濟的には地代の本質に何等の變化も與へない。即ち、直接生産者の勞働時間の一部、本來的には、彼の必須的生活資料を超過する勞働時間の殆ど全部は、無償で土地所有者に占有されるのである。しかし生産物地代は、次の諸點において勞働地代と區別される。(一)土地所有者は剰餘勞働を最早直接勞働の形態で受けずに、生産物の形態で受取るといふこと。從つて直接生産者は、多かれ少なかれ、自己の全勞働時間の利用を意の儘に處理する。(二)この地代形態のもとにおいては、直接生産者は、剰餘勞働を、最早直接、地主またはその代理者の監督と强制のもとにおいて提供するのではなく、自分自身の責任のもとに

剩餘勞働を給付せねばならないといふこと。

3、貨幣地代　生産物地代が勞働地代の轉化したものにすぎない如く、貨幣地代は、生産物地代の形態の變化したものである。この形態の地代においては、直接的生産者は、生産物自身ではなく、生産物の價格を地主に支拂ふ。この地代形態は、次の諸點において、生産物地代と異る。即ち、(一)彼の生産物の中の地代に充當せらるべき部分は、今や商品に轉化され、商品として生産されなければならない。(二)貨幣地代のもとにおいては、直接的生産者の所有に屬する土地とは區別されるところの生産諸條件（農業要具、家畜、その他の動産）が土地に對立して、重要なる獨立的要素として發達する。(三)生産物地代の貨幣地代への轉化は、何等の財産を有たず、貨幣によつて雇傭される日傭勞働者の一階級の成立を必然的に伴ふ。從つてこの地代形態のもとにおいて、農業の商品生産への轉化、並びに農民の資本家と賃銀勞働者への分裂の過程が展開する。

4、資本制地代　地代が貨幣地代の形態をとり、それと共に地代を支拂ふ農民と地主との間の關係が、契約的の形態をとるや、富農と相並んで必然に從來農村の外部にゐた資本家もまた、土地を賃借して、都市において得た資本と、すでに都市において發達した資本制經營方法、即ち生産物をば單なる商品として、剩餘價値獲得の手段として生産する經營方法を、農業の上に移植するに至る。

生産物地代の貨幣地代への轉化は、たゞ賃銀を目的として傭はれる、日傭勞働者階級を形成するが、この階級の發生時代、即ち、この階級が僅かに散在的に現はれる時代には、恰も封建時代において、比較的富裕なる小農が、農奴を傭つてゐた如く、比較的富裕ではあるが、地代を拂つてゐる小農が、自己の計算をもつて村落の日傭勞働者を搾取するといふ現象が生ずる。か

くてこれらの小農は、漸次一定の財産を蓄積し、やがて資本家となる。そして、その發達は農業以外の資本家的生産の一般的發達を條件とするものである。

農村住民の一部が、農村より追放せらるゝことは、單に工業資本のために、勞働者をその生活手段、その勞働材料から『解放』するばかりでなく、さらに國内市場をも作り出すのである。農村人口の貧困と破産とは、それ自身、資本のために勞働豫備軍を作る役割を演ずる。だから、あらゆる資本主義國家において、農村人口の一部は絶えず、都市または工場のプロレタリアたらんとする過渡的狀態にある。相對的過剰人口の源泉は常に絶えない。農業勞働者は賃銀の最低水準に引下ろされ、常にその片足をもつて、赤貧の泥濘の中に立つてゐる。資本主義のもとでは、農民の搾取と工業プロレタリアートの搾取とは、單に形態上の相違のみである。搾取者は同じ資本家である。個々の資本家は、個々の農民を抵當および高利の手段によつて搾取する。資本家の階級は農民の階級を國税の手段によつて搾取する。農民の土地の小片は、資本家たちに、農業から利潤、利子、地代を引出し、耕作農民自身が、如何に彼の賃銀を打出すかを傍觀することを許すところの、一つの口實にすぎない。農民は資本家階級に、その賃銀の一部を提供し、自己の賃銀のみならず、彼自身私有者でありながら『アイルランドの小作人』の程度にまで沈淪するのが常である。小農的土地所有の優越せる國家においては、資本主義的生産方法の優越せる國家においてよりも、穀物の價格が低いのは、農民が剰餘生産物の一部を無償で社會に、卽ち資本家階級に提供するからである。從つて、この農業生産物の價値の安いことは、生産者の貧困の結果であつて、決して彼等の勞働生産力の結果ではないのである。小生産の正常な形態たる小農的土地所有は、農業資本主義のもとにおいては消滅する。